モラロジーの現代的意義

下　程　勇　吉

1．近代日本の国家的課題と科学技術
2．「工業化」の明暗両面性――「苦しさと空しさ」の二重奏
3．意味の根源の枯渇
4．虚無主義の生態
5．現代の「世界史的人類的課題」――「脱工業化」
6．絶望的限界状況と「意味への意志」
7．意味賦与圏としての最高道徳的地平――人智と霊智
8．一切を包擁する原理
9．最高道徳的全智の実践的性格
10．モラロジー教育の根本原理

1．　近代日本の国家的課題と科学技術

16・7世紀の頃から組織されたオランダ・フランス・イギリスの東印度会社は、その強力な経済力・軍事力を背景として、東洋侵略の歩みを着々とおしすすめ、ことにイギリスの東印度会社は覇権をにぎり、1858年には、インドは全面的に英国の直轄領土となったのであった。またその頃、英国は阿片戦

争（1840—42）を強行し、南京条約（1842）によって清国をも植民地化の大渦に巻き込んだのであった。その間にあって、日本国のみがかかる植民地化の大勢をいわゆる半植民地化の状態に食い止め、半世紀の間に東洋唯一の近代的独立国家の実をあげることを得たのであるが、かかる歴史的業績を達成し得た原因は、何処に求められるのであろうか。明治維新前後に日本が植民地化を阻止し得た原因は、物心両面にわたる幾多の条件がからみあっているのであって、世上しばしばとくに高調せられる勤王攘夷運動のみがいわゆる回天の偉業を成就したのではない。当時最大の国家的脅威であった外国の勢力の侵攻についていえば、たまたま当時米英仏露の諸列強が時を同じうして迫り来って、幕府や薩長その他の雄藩とそれぞれ気脈を通じ、その間に微妙な勢力平衡（バランス・オブ・パワー）が保たれ、一強国のみの全面的侵略を許さなかったことも、日本の植民地化を阻ばんだ一因であった。さらに日本の植民地化を阻止するために、何よりも必要であったのは、封建的分封体制を再組織して近代的統一国家を形成することであったが、その点からいえば、当時の日本は自然経済を超えて商工業化もかなり進み、海陸両面の交通網も整備されていて、近代的国家成立の基本的条件ができていた上に、庶民教育もかなり行きわたっていて、国民的自覚による近代国家建設という精神的条件も相当にそなわっていたのである。かかる物心両面を十分考慮しない性急な精神主義的歴史観は、到底歴史の真相に迫り得ぬものであるが、かかる諸条件を十分に生かし、よく日本国の独立という歴史的課題を達成したところに、当時の歴史的指導者の真骨頂があるのである。

その代表的人物の一人として吉田松陰がある。彼は阿片戦争勃発の年に11才にしてつとに藩主の前で兵書を講じたのであるが、彼は阿片戦争を対岸の火災視するに忍びず、東洋を全面的に植民地化せんとする西欧諸国家の脅威を日本国家の焦眉の急としてとらえ、逸速く蹶起した維新前夜の先駆的指導者の一人であった。彼の熱烈な尊王攘夷精神の中核をなすものは、西力東漸の大渦に抗して日本植民地化を阻止し、日本国家の独立を確保することを期する金剛不壊の信念であった。日本国の独立を念じてやまなかった点では、

明治維新後の代表的指導者であった福沢諭吉も、その精神を一にしたのである。このことは「福翁自伝」の一節を顧みるだけでも明らかである。「維新前後無茶苦茶の形勢を見て、とてもこの有様では、国の独立はむづかしい、他年一日外国人から如何なる侮辱をこうむるかも知れぬ、さればとて、今日全国中の東西南北いずれを見ても、ともに語るべき人はない。自分一人ではもちろん何事もできず、またその勇気もない。実に情ないことであるが、いよいよ外人が手を出して跋扈乱暴というときには、自分は何とかしてその禍を避けるとするも、行く先きの永い子供は可愛そうだ。一命かけても外国人の奴隷にはしたくない。」実にこの一念よりして、「さりとて、自分は日本人なり」という自覚に徹した福沢は、「ただ日本に居て、何か勉めて見ようと安心決定し」、教育と学問の開発による立国の道を「文明開化」「独立自尊」のイデオロギーのもとに推し進め、日本の近代化をはかり、日本独立の実をあげる指導者となったのである。

維新前夜の先覚者吉田松陰と維新以後の指導者福沢諭吉とは、その封建的な「尊王攘夷」というイデオロギーと近代的な「文明開化」というイデオロギーとのきびしい対立をこえて、ひとしく日本国家の独立と日本民族の自由に対する献身的熱意によって貫かれた代表的日本人であった。ここに、「国のために」生きぬくところに、生きる意味を見出し、生き甲斐をつかみとった代表的日本人のめざましいすがたが、歴史の波の起伏の間に高く聳え立っている。彼等を代表的指導者とする当時の日本人がよく巨大なる西力東漸の大渦に抗し、他の東洋の老大国を襲った植民地化という亡国的非運より日本国の独立をまもりぬくという「近代日本の国家的課題」に取り組み、よく半世紀を満たずして日本国を封建的分封国家より一応近代的統一国家に再組織し得た、その歴史的業績は、実に鎌倉仏教の成立とともに、世界史的な達成とも奇蹟とも評価せられるのは、偶然ではないのである。

かかる世界史的業績を可能にした手段としては、如何なる手段がとられたのであろうか。いわゆる精神やイデオロギーをすべてとする主観主義や精神主義だけでは、かかる歴史的業績は到底達成せられぬ以上、当然この点が問

われねばならぬのである。ここで先ず想起されるのは、吉田松陰の「六字の名号」である。孫子に深く学ぶところのあった松陰は、「治己知彼応変」という「六字の名号」をもって、「天下のこと、この六字の外なること能わず」として、これをもって兵法家のモットーとしたのであった。すなわち、兵法家吉田松陰は、先ず「己を治める」ことにより自己の根源的主体性を確立し自己確認の実をあげるとともに、「彼を知る」ことにより、自分が対決せねばならぬ敵の手を読みとり、もって「変に応じ」、激動する非常時局によく対処しようとしたのであった。この点では、彼がつねに西洋兵学の師と仰いだ佐久間象山も軌を一にして次のごとく説いている、「彼を知らず、己を知らざれば、戦うごとに必ず敗るるは、固(もと)よりなり。しかも彼を知り、己を知るも、今時にありては、いまだ戦を言うべからず。ことごとく彼の善くするところを善くして、しかも己の能くするところを喪(うしな)わずして、然る後にはじめて以って、戦を言ふべし」(「省嚮(ゲン)録」)「己を知る」より発して、「彼を知り」「彼(西洋)の能くするところを喪わざる」ところに、佐久間象山は「東洋の道徳、西洋の芸術(技術)と精粗遺(のこ)さず、表裏兼ね該(か)ねし」もって日本的主体性を具体的現実に即して確立する道を先駆的に切り開き、松陰の師となったのである。明治精神が深く豊かな東洋的日本的道徳精神よりして、精密をきわめる西洋的近代的科学技術(テクノロジー)を摂取したところに、他の東洋諸国家に見られなかった日本の近代的国家創建の深い秘密の主要な根源の一つがあったのである。まさに印度・シナ等の老大国を一たまりもなく植民地化する武器となったものは、強大な経済力、別して圧倒的な軍事力であるが、それを生んだものは精密科学の原型としての数学を根本とする近代科学の成果、すなわち科学技術・技術文明・機械文明そのものである。この点をつとに洞察した佐久間象山は上掲の引用文についで次のごとく道破している、「詳証術(数学)は、万学の基本なり、泰西にてこの術を発明し、兵略もまた大いに進み、窅然(けいぜん)(はるかに)として往事と別なり、……今真に武備を修飾せんと欲せば、先ずこの学科を興すにあらずんば、不可なり。」この精神をまともにうけついで起ち上った松陰は「夷の礮碩(大砲)・船艦・医薬の法・天地の

学、みな吾れにおいて用あり、よろしく採択すべし」として、「六字の名号」の兵学的精神よりして「彼を知る」ために、敢然下田の米艦に乗り込み、米国渡航の挙に出たのであった。西洋諸国の圧倒的経済力・軍事力の核心が科学技術(テクノロジー)にあることを逸早く慧眼もって洞察し、その摂取に果敢であったところに、よく日本国の独立と日本民族の自由とを守りぬく「近代日本の国家的課題」にこたえた当時の先駆的指導者を中心とする日本人の歴史的卓越性があったといわれる。かかる基本的精神はイデオロギーの対立をこえて、日本国民の各階層にうけつがれ、いわゆる「明治精神」となったのである。実にテクノロジーという敵の武器を我がものとして、西洋に対決し、日本国の独立と近代化を成就するという「近代日本の国家的課題」を解決したところに、鎌倉仏教の成立と併称される日本民族の世界史的業績がみとめられることは、トインビー等が力説する通りである。ここには、明確に「日本国のために」西洋の科学技術を摂取するという国民的自覚があり、そこに人々は、「生きる意味」(フランクル)を見出し、生き甲斐を感じたのであった。このことの意味は、実に深いのである。実にかかるテクノロジーの摂取が行われたが故に、近代国家社会の再編成的形成という国家的国民的業績が達成せられたとともに、昭和の悲劇に際しても、よく焦土の中から起ち上る国家再建の道も切り開かれたのであった。すなわち日本が西独とともに壊滅的敗戦から奇蹟的に復興の実をあげ得たのは、一に両国ともにテクノロジーが高度に発達していたという社会的基盤があったからである。

2. 「工業化」の明暗両面性——「苦しさと空しさ」の二重奏

近代文明を成立せしめたものは、実に科学技術である。いわゆる文明開化の鍵は、テクノロジーである。先進国とは、科学技術の国家であり、文明とは機械文明・技術文明の謂(いい)であり、文明の進歩とは技術の進歩にほかならないといわれる所以である。テクノロジーこそは、イデオロギーの対立を超えて、現代のすべての文明国を全面的に規定し支配する決定的契機である。従

ってテクノロジーをぬきにして、現代の社会ならびに教育を語ることはできない。

かくも重大なる意味をもつ科学技術の成立過程は如何なるものであったのであろうか。技術の成立は人間の成立と時を共にしている。人間が直立人 homo erectus として成立したとき、人間は同時に道具をつくる技術人 homo faber として立ち上ったのである。如何なる原始人も、道具をつくり道具を使用する点で、他の動物と区別されるのである。人間が「直立人」として地上に直立し、二足で歩行するに至ったとき、手が自由に使用されるとともに、頭脳もめざましい発達をとげ（資料集 1. 44—5、434—5）、頭の知性的なはたらきと手の機能的な操作とは相俟って、いわゆる「手の延長」として道具が製作され使用されるに至ったのであった。人間はフランクリンのいわゆる「道具をつくる動物」tool-making animal である。直立歩行し、道具をつくり、さらに言語をもち、そこから社会をもつにいたって、人間は地上を征服したのであるが、とくに道具の発明と使用とは人間の技術発達の第一段階であった。道具をつくり、使用する動物として、人間は工作人である。さらに技術の進歩は、道具の地平をこえて「道具を作る道具」としての機械の発明という驚異的飛躍の段階を迎え、ここに産業は鎌・鍬のごとき単純な道具によって自然（田畑）にはたらきかけ、食物を生産する農業の段階をこえて、機械による多量の商品を生産する商工業の段階に入り、いわゆる「工業化」が進むのである。かかる工業化の発展とともに、社会は農村中心より都市中心となり、いわゆる「都市化」が進み、経済は農業中心の自然経済から商工業中心の商品・貨幣経済に進んだのである。これを要するに、技術の進歩が原始的な道具の段階から複雑な機械を生み、「工業化」「都市化」は急速に進んだのであるが、ことに今世紀に入るに及んで、精密科学の飛躍的な進歩による技術革新はついにオートメーション時代を出現させ、さらにコンピューター中心のサイバネティクス（人工頭脳学）・エレクトロニクス（電子工学）の驚異的発達によるシステム化は、人類をして地上征服の地平をはるかに超えて、人工衛星による宇宙探検をも可能にしたのであった。実に「工業

化」の極において、人類のテクノロジーが宇宙的規模において驚異的発達をとげただけに、その人類に対する影響は明暗ともにまことに圧倒的なものがあるのである。今やわれわれはテクノロジーの影響と意味を明暗両面にわたって検討せねばならない。

空襲または極度の食糧不足に日夜悩まされ、死生の間に彷徨していた戦時中または終戦直後のわれわれは、ただ生きのびることのみがその日その日の念願または要求であった。その間のことを想起すれば、「自己保存の要求」または「生存の要求」need of survival が如何に深刻なものであるかが知られるであろう。ところがかねてよりテクノロジーが高度に発達していた我が国が西独とともにめざましい復興をとげ、いわゆる高度経済成長によりて「昭和元禄」を謳歌するにいたったとき、一応衣食に事足りて「生存への要求」は充たされても、日々の生活にむしろ倦怠を覚え、戦時中よりも「心のはり」を喪い、何もかも白けて生き甲斐を覚えなくなり、生きる意味を見喪い、虚無主義的となり、人々はテクノロジー文明につきものの「苦しさと空しさとの二重奏」に悩まされている。ここでは、すべてが無意味であり、生活は空虚で充実感に欠けている。すなわち、マムフォード Mumford, L. が「生存への要求」と並べてあげた「生活充実への要求」need of fulfilment またはフランクル Frankl, V. のいわゆる「意味への意志」der Wille zum Sinn が充されなくなり、虚無主義が社会の上下を蔽うところに、自然破壊または公害とともに、テクノロジーのもたらす世紀的人類的問題が生じたのである。

地上征服から宇宙探険にも及ぶテクノロジーの驚異的進歩は、先ず「物」の面において、戦後の復興をもたらし、「生存への要求」を充たしたのみならず、人々の生活に多くの物質的便益や時間的余裕をつくり出し、いわゆる優雅な生活をも可能にしたのであるが、かかるプラスはまた恐るべき脅威をも伴って来たのである。すなわち、致命的な自然破壊・公害・複合汚染・交通地獄・核兵器の拡散等等である。これらはいずれも人類の命運そのものを脅かすものである。ここで、とくに注目すべきことは、テクノロジーの飛躍

的展開を動機付けるものは、一方では高利潤追及という企業的要求であり、他方では敵国制圧をめざす軍事的要請である。これらは全面的に個人的国家的利己心から生れるものである。まさに人間を生かすかわりに、核兵器等のごとく、人間を殺す武器を極限にまで発達させるテクノロジーは、人類が生んだ最大の鬼子である。テクノロジーの驚異的発達は、工業化・都市化の極、実に自然と生きたつながりを断ち切り、人間を大地より引きはなし、清らかな空気・水・緑の山河・静かな環境を失わせ、空にはスモッグ、地上には複合汚染、海中にもヘドロが充ち、いたるところ食糧不足の危機が迫り、地球全体が核爆発の脅威にさらされて、今や人類全体の「生存への要求」は暗雲にまきこまれつつあるのである。

以上は、「物」の面におけるテクノロジーのプラス・マイナス面であるが、「心」の面もそれに劣らず致命的な問題をつきつけられているのである。テクノロジー万能の機械文明の現代社会においては、数理によってすべてが割り出される合理性が全生活面を支配し、人間はあらゆる局面において数字の奴隷となり、過度の精神的緊張を強いられるか、さもなければ、オートメ化による単純労働に伴う空虚感に襲われ、そこから曾ての平和な農村における筋肉労働とは性格を異にする、ストレスによる「苦しさ」に悩まされるに至り、現在のホワイト・カラーはノイローゼその他の情緒的不安定症によって、人間疎外的危機にさらされている。

しかも、この事態は、また技術文明の社会のもついろいろな性格から拍車をかけられ、「苦しさ」に加えて「空しさ」のおまけがつくことによって、「苦しさと空しさとの二重奏」が現代人を決定的に虚無主義の深淵に誘いこむに至っている。先ず第一に、技術文明の社会はあげて「管理社会」である。管理社会は、固い一定の枠組をもって、個人の希望や個性を無視して、その成員（メンバー）を拘束し規格化し、否応なしにその官僚機構の奴隷にしているだけでなく、その固い狭い枠組の中では、人々は陰惨な競争やいわゆる「敵対的協力」（リースマン）を余儀なくされている。すなわち、管理社会の個性没却的非情性である。かかる非情性の職域において、高度の精神労働や一律の

単純労働を強いられるのであるから、中世の職人気質の職人やマイスター（親方・師匠）に見るような、「仕事そのものにうちこんで生きる充実感」、あるいは「自分自身の為に生きる」自己確認のよろこびなど思いもよらず、現代社会のホワイト・カラーは憂鬱であり、孤独であること、ミルズなどがつぶさに明らかにした通りである。ところで、その非情性の職場を離れると、人々は大都市の雑踏の中にあって、相互に心のつながりも何もないばらばらの大衆として、一人一人孤独である。リースマンのいわゆる「孤独なる群集」である。すなわち、大衆社会の根本的性格は孤独性である。そうした「大衆社会」においては、その孤独性を忘れるために、人々はひたすらに心のアンテナを外側に向け、他人の情報のみに心を奪われ、ますます自己の内部を空洞化するのみである。いわゆる「情報化社会」である。情報化社会においては、その他人志向性によって、人々は内面的充実性を失い、いよいよ自己喪失に導かれる空虚性がはびこりて止まるところがなく、いわゆる一億総白痴化のテレビ全盛時代の人間喜劇が厭くこともなく繰返される。テレビに出れば、一世一代の光栄であるとまで本気で思い込むほど、現代人の心は空っぽになりつくし、現代人はテレビのスターだけが偉いと正直に思い込んでいるのである。

そんなおめでたい現代人は、また他面民主主義の名のもとに、無制限・無責任のいわゆる自由をあらゆる面で主張し、個人及びその所属集団の利益・権利を追求してはばかるところなく、その利己的本能のおもむくままに、自他相互の間ならびにその所属集団相互の間に、とくに保守派と革新派との間に、きびしい対立・抗争を生じ、収奪・訴訟・ゴネドク・ストライキ等の権力闘争がくりひろげられ、国家権力といえども、訴えられれば、受けて立たざるを得ぬ一権力にすぎない。その限り、近代国家は、多くの権力の間に対立・抗争の渦まく「多元的国家」にすぎない。そこでは、民主主義の美名のもとに、不信と反目が渦まくところ、ついには食うか食われるかの闘争がくりひろげられる残忍性が支配している。そこには、「三方よし」どころか、「二方よし」の道もなく、ただひたすらに「一方よし」の利己心の跳梁ある

のみで、相互確認による「つながり」のよろこびなど地を掃っている。しかも、かかる対立・抗争の場は国内のみでなく、国際的にもすさまじい勢でくりひろげられている。先進国・開発途上国・未開発国相互間のみならず、それぞれの国の内部にいわゆる超大国の対立・抗争が代理戦争の形でそのまま入り込み、ベトナムやアンゴラ等にこの世の地獄をくりひろげたのであった。しかも米ソの超大国のみならず、英国・仏国・中国・印度まで核武装に狂奔し、イデオロギーや利害の対立の激化するところ、いつ核戦争が全地球的規模の人類絶滅の終末論的破局を招来するかも知れぬのである。ここにいたれば、テクノロジー発達の絶頂がヒューマニティ頽廃の奈落そのものであるというのほかはない。

かくして、テクノロジー中心の近代社会においては、管理社会の非情性、大衆社会の孤独性、情報化社会の空虚性、多元的国家の残忍性、核戦争の重圧性、これらはあげてひとしく生きることの「空しさ」を人々に痛感させずにはおかないのである。さりなくても、テクノロジー・機械文明は人々を数の奴隷にし、また単純労働の具とすることによって、人々にストレスをつきつけ、人間疎外的な「苦しさ」をもって人々を脅かしているのに、その上に加えて管理社会・大衆社会・情報化社会・多元的国家というような近代社会の性格は、人々に「空しさ」をつきつけてやまないのである。まさに「苦しさと空しさの二重奏」である。苦しい上に、すべてが空しいときに、人間は虚無主義的となり、全面的に「生きる意味」「生き甲斐」「生きるよろこび」を喪失し、その極、人格崩壊の深淵に落ち込み、精神病・犯罪・自殺という典型的な人間疎外の暗黒にとざされ、機械が全(すべて)となるに反比例して、人間は零となり「生ける屍」となるのである。

もともと、テクノロジーが生れたのは、自己保存の本能または利己的本能にもとずいてすべてのものを利用するために、人間が道具や機械をつくり、それによって自然存在にはたらきかけたからであった。そこでは無垢の自然もその本来の天真性を失い、すべてが道具となり、人間まで道具化せられ、とくに戦争遂行という人間の利己心の極限的肥大化の場では、テクノロジー

は生体実験とか原爆投下という悪魔的残虐行為をも平然としてしでかすのである。すべてが利己心から割り出されるところ、テクノロジーの場は一切を非人間化し、すべての存在から光を奪い去るのである。そこでは、すべてがむくつけき利己心から割り出されるから、自己保存の本能ないし利己的本能に発する「生存への要求」が昭和元禄的にたっぷり充されるならば、「何のために生きるか」という「生活充実への要求」は問題にもならないのである。すなわち、人は肥えた豚として、満足すればよいのであって、やせたソクラテスとして、生きる意味を探り、真理を求め悩むなど、およそナンセンスそのものである。とくにテクノロジー中心の社会は、上述のごとく、それ独特の「苦しさと空しさの二重奏」によって、何もかも無意味にし、すべてが白けて虚無主義的となり、人々は、何のために生きるかを知らず、またそれを知ろうともしない。まさに「生活充実への要求」「価値実現の要求」「意味への意志」の冬眠または仮死状態である。

3. 意味の根源の枯渇

今や人には虚無の深淵または急流に漂い、「何のために」生きているのかを知らず、それを知ろうともしない。まさにテクノロジー全盛の昭和元禄時代は、酔生夢死的虚無主義の瀰漫時代である。今日曾て吉田松陰等のごとく、肚の底の本音から「国のために」生きるところに、生きる意味と生き甲斐を見出している人が果して何人いるであろうか。歌謡曲やパチンコにうつつをぬかしても、国家的国民的伝統に深く思いをいたすがごときことは、問題になっていないのではないか。明治精神にとっては、いわば国家伝統は意味と価値の根源であり、本音から「国家のために」生きるところに、人々の生き甲斐と誇があったのであった。そこでは、「国」と「家」とは一セットを成し、「国のために」と「家のために」とは相互不可分の関係をもち、いわゆる国家道徳が国の中心としての君に忠、家の中心としての親に孝を力説する「忠孝道徳」として成立し、そこから国家伝統とともに家の伝統が重んぜられたのであった。しかし今日では如何であろうか。マイ・ホームにしが

みつく小市民的意識はあっても、家の伝統を重んずる精神よりして「家のために」生きる徳を全くするところに、生きる意味と生き甲斐を見出す人がどれだけあるであろうか。

ところで、忠孝中心の国家道徳のイデオロギーが絶対化せられた極、昭和の亡国的非運に見舞われるに及んで、国家道徳は追放され、戦後はいわゆる民主主義道徳が高調せられるにいたったが、それは果して今日日本の社会に十分根をおろしているのであろうか。もともと、本来の民主主義なるものは、リンカーンのゲッティスバークの名演説において、「人々のための、人々の手による、人々の政治」とあざやかに定式化せられたごとく、肚の底の本音からして「人々のために」生きるところに、人間本来の在り方と生きる意味を見出すものである。しかし現在の我が国のいわゆる民主主義なるものは、むしろ個人及び特定集団の利己的動機よりしてその利益・権利を無際限に主張するのに急であって、本音から「人々のために」生きる社会奉仕的精神に欠けているのではないか。「社会のために」生きるところに、人間本来の生きる意味と生き甲斐を見出すことがない限り、いくら"民主主義"をふりかざしても、それはすべて国家社会を亡ぼしたギリシヤ末期の"民主主義"の亜流にすぎない。

かくて、「国のために」「家のために」「社会のために」の三者のいずれも、仮死状態にあるとき、はびこるものは、臆面もなく「世界は二人のために」と唄うどころでなく、「すべては己れ一人のために」とうそぶく「高き固き狭き心」すなわち利己心の暗黒のみである。ここに、精神の光は全面的に失われ、何もかも無意味(ナンセンス)となり、虚無のベールが一切を蔽うにいたるのである。かかる絶対の闇の支配する絶望的な場において、その絶対的な暗黒を絶望的に自覚するところに、神・仏・天の絶対的な光を浴び、無意味と虚無の極に反射的に絶対的な意味と光明を見出す点で、鎌倉仏教の指導者道元・日蓮・親鸞のごとき宗教家は、現在どこに見られるであろうか(拙著「宗教的自覚と人間形成」参照)。すなわちすべてが利己心の暗黒にとざされるとき、それと対蹠的に神の慈悲の光明のもとに、肚の底の本音から「神のために」

「仏のために」生き、よく神の心をつぐ精神的伝統を生かす魂は生きているのであろうか。その点は、「ゆく年のわれに神なし仏なし」(正岡子規)の嘆なきを得ぬのが、我が国のありのままの現状ではないか。

4. 虚無主義の生態

いまや「国のために」「家のために」「社会のために」「神のために」という意味の源泉はことごとく枯渇し、国家伝統・家の伝統・社会奉仕的伝統・精神伝統のいずれも虚無のベールに蔽われている。もともと肚の底の本音から「……のために」生きるところに、あらゆる「苦しさ」にもたえて生きぬく意味のある生活が成り立つこと、ニイチェがつきとめた通りである。いくら現実の生活は苦しくても、可愛い「我が子のために」に親は生活苦と戦うことに生きる意味を見出し、よく人生苦にもちこたえるのみならず、「生活充実の要求」または「意味への意志」を充す充実感において生き甲斐と生きるよろこびを享け得るのである。しかるに、本音から国・家・社会・神のいずれの「ために」も生きる意味を見出し得ぬところに、現在の日本の虚無主義的社会の「精神的真空状態」がある。何もかも重苦しく，鬱陶しく，わびしく空しく、すべてが白けているのである。今や「国のために」とか「家のために」とか「社会のために」とか「神のために」とかなどというのは、愚の極である。ただ可愛いのは、我が身だけである。さりとて、正面から虚無の重圧に取り組むのも、面倒でうるさいから、その日その日の風のふくままに、時の流れに身を任せ、その場その場で逃げの手をうち、その時その時の現在の瞬間をごまかすあるのみである。すなわち人は逃避主義の奴隷として、時の流れに漂う浮草となるのである。現代の虚無主義の嫡出児は、逃避主義である。その核心をなすものは、瞬間的な快を貪ることに終始する利己心の「高き固き狭き心」そのものである。虚無主義が身をよせる最後の牙城は、ドストエフスキーが鋭く洞察したごとく、歯痛そのものにも瞬間の快感を求めるにも似た、自己自身をおとしめ侮辱して、自己嗜虐的快楽を覚えるような、卑しさの限りの利己的本能そのものである。そこでは、自己中心的

に自己を高しとし固く守る狭い心がすべてである。愛も慈悲心も責任も自覚も何もあったものではない。ともかくその瞬間瞬間の快を貪り、「苦しさと空しさの二重奏」から逃れ、それを忘れさえすれば、それでよいのである。ここに「高き固き狭き心」そのものの利己的本能を最後の牙城とする虚無主義のあらゆる逃避的生態がいたるところに繰りひろげられるのである。

先づ第一に一番穏健で現代の社会に一般的に見られるものとしてあげられるのは、枠組主義である。すなわち、大多数の人々は、ともかく管理社会の枠組に入り、定時に出勤し、日々のつとめをはたし、自分自身とせいぜいマイ・ホームのみのために、自分の権利と利益を主張するのが精一杯で、それ以上に出ることは、一切御免である。ここでも利己的本能にもとずく「高き固き狭き心」がすべてを支配しているのである。ところが、ただ枠組に入っているだけで、内側はからっぽであるだけに、外側の恰好のよさやスマートなことだけに重きがおかれ、ピカピカ耀やくジェラルミン主義(学祖広池博士のいわゆる眩惑主義)がこの世の春を謳歌している。「光りて耀やかず」とか「良賈(よい商人)は深く蔵して虚しきがごとし」とかいう老子の哲学などは、問題にもならぬのである。ともかく恰好さえよければ、よいのである。恰好のよさという外部基準ですべてがはかられる恰好主義である。そうした外のものさしにしがみつく「固い心」の恰好主義も、一皮むけば、どの瞬間も心の内は空しく、その本音は苦しいのである。そうした苦しく空しい刻々の瞬間から一刻も早くぬけ出したいのである。すなわち無意味なはりのない瞬間を一刻も早く後にしたい脱出主義である。雷族をはじめ、現代人のスピード狂的傾向はもとよりのこと、国の内外を問わず、旅行さえすれば、それでよいという異常な旅行熱など、みな脱出主義のあらわれならぬはない。そこでは、管理社会のマンネリズム的枠組から脱け出させる目先きの変ったものがひたすらに求められるのである。すなわち新奇主義である。ともかく目先が変われば、それでよいという「狭い心」から、人々は目新しい流行にうつつをぬかし、いわゆるニュー・ファッションに一も二もなく目を奪われ、センセーショナルなニューズに飛びつくのである。いわゆる情報化社会の常として、週刊

紙等はスター歌手等の他愛もない情事などデカデカ書きたてて、ミイチャン、ハアチャン的存在の好奇心をあおる「衝撃的告白」なるものを十年一日のごとく満載して倦むことを知らない。学祖はその当時のジャーナリズムを「眩惑主義」として鋭く批判されたが、今や煽情的ジャーナリズムという消費文化の大流行である。そうした週刊紙熱を凌ぐばかりのものは、圧倒的な漫画熱である。現代社会がつきつける「苦しさと空しさの二重奏」をしばしば忘れさせる白昼夢の場を提供し、テレビ以上に「一億総白痴化」に貢献するトップ・バッターが漫画である。漫画にうつつをぬかす現代人の“童心”の憐れさを見よ。老若男女あげて、現実のきびしさと空しさにたえかねて、漫画に逃避して白昼夢に耽けるのである。漫画は現代人の逃避主義の牙城である。虚無主義の悪夢に襲われる現代人を全面的に支配するものは、まさに逃避主義である。現実社会の重圧を正受し、自己本来のものにかえり、自己の本音を生かして、自己確認の実をあげるとともに、そこから自他ともにその本来の面目を共感的に生かす相互確認の場にかえり、そこに生き甲斐と生きるよろこびを享けるよりも、むしろ現実社会の重圧から逃避し、束の間でも「苦しさと空しさの二重奏」を忘れさす瞬間の陶酔を買えるものであるならば、何でも歓迎されるのである。かくて瞬間の陶酔のみに耽ける「狭き心」の利己心にこたえて、現代人の御機嫌伺いに恰好よく登場するのが、歌謡曲・野球・角力・プロレス等々、各界のスターであり、タレントである。現代の大衆社会は、いわゆるスターやタレントが君臨する社会である。甘たるいセンチメンタルな節まわしにせよ、一打よく本塁打が飛び出すスリルにせよ、ともかくその瞬間の陶酔を提供するスターは、法外のギャラが与えられ、さらには数百万票まで与えられて、国会議員の席までぬれ手の粟で手に入れられるのである。まさに陶酔主義の花盛りの大衆社会である。しかし、この点ではテクノロジー中心の現代社会は、ぬかりなくテクノロジーの成果である化学製品にも陶酔主義の役割を一役も二役も買わせている。この世の憂さを掃う玉の箒としての酒・ウイスキーや古典的な陶酔物質としての阿片はもとより、科学技術全盛時代にふさわしく、マリファナ・ＬＳＤ・ボンド

等が如何に現代社会の陶酔主義に大きな役割を演じているかは、改めて説く必要もないくらいである。騒音雑音に満ちた現代の社会では、深い古典音楽をじっくり味わうゆとりも何もないままに、「苦しさと空しさの二重奏」の瞬間を忘れさすジャズ・マンボ・ロカビリー・ゴーゴーに人々はシビレるのである。いわば、轟々主義である。

以上いろいろあげた陶酔物質等によって、人間の知性・良心という上部構造は、いわば眠らされるから、人々は現実の苦しさ・空しさという重荷からしばし解放せられ、陶酔境に逃避できるのであるが、その際、人間の上部構造はいわば麻酔させられ、人間は本能・快楽中心の下部構造的存在に還元せられ、いわば動物化し、リビドー的衝動に支配せられ、セックスの快楽に耽けるにいたるのである。いわゆるポルノ全盛の社会であり、快楽主義の時代である。快楽主義こそ、利己心の塊そのものともいうべき「固き狭き心」である。というのも、それは過去と将来を視界から切り捨て現在の一刹那のみに陶酔するものとして刹那主義そのものであるからである。高度経済成長による昭和元禄的余沢を浴し、ひたすらに刹那の快楽を追うところ、過去に鑑み将来に備えて徳をつむ「遠く広い心」の長期建設的努力など更に眼中になく、人々は短絡行動的に賭にはしるに急である。まさに一発主義の花盛りである。パチンコ・宝くじ・競馬・競輪・競艇など、ギャンブリングの大流行である。三分半に百数十億の馬券が乱れ飛ぶのである。今や人々は長い射程においてじっくり歩一歩計画的良心的にきずきあげるどころか一攫千金のギャンブリングのみならず、動物的衝動の趣くままに、一刀両断の暴力行動に突っぱしるのである。知性と良心を麻痺させて動物化した人間は、セックスと暴力の奴隷となるのである。このことは、大流行の漫画、さらには映画が明々白々に示すところである。今日の漫画と映画はセックスと暴力の独壇場である。ここでサルトルが「悪魔はセックスと暴力で祭をする」と説いたことが想起せられるのであるが、この点では、東大紛争のとき、安田講堂の前で「戦争をやめて恋愛を！」と唱えるヒッピー族と「戦争をやめて革命を！」と叫ぶゲバルト学生とが交歓会を開いたことは、現代の虚無主義的社

会にとって、象徴的な意味をもっているといわれよう。もとよりゲバルト学生の暴力主義は、やくざ暴力団や西部劇などの暴力とはその性格を異にしている。彼等の暴力主義の根底をなすものは、現代の腐敗した社会に反逆し、その不正と不義の社会機構をくつがえす手段としての暴力には正義と真理の根拠があるとする「造(ナスル)反(ヲ)有(リ)理」という革命哲学のイデオロギーである。しかもそのイデオロギーは、「歴史の必然性」「歴史の真理」そのものとして絶対に正しい真理そのものと誇称せられている。すなわち「イデオロギーの絶対化」である。しかし如何なるイデオロギーも、社会の上部構造に属する歴史的産物であること、革命主義者が信奉してやまぬマルクスの説く通りではないか。その限り、彼等の力説する革命哲学的イデオロギーも、歴史的産物である。その限り、それは時代とともに変る相対的なものにすぎない。神仏ならぬ人間の頭脳から生れた歴史的産物としてのイデオロギーは、ついに超歴史的絶対的真理ではなく、歴史的相対的なることを免れぬのである。相対的なるものを絶対的なものとして、イデオロギーの絶対化はついに狂信主義以外の何ものでもない。ここに、零点の虚無主義は満点の狂信主義に変身し転化するのである。いうまでもなく、暴力革命という政治的実践の場は、それこそ「食うか食われるか」というぎりぎりの場であり、孫子流にいえば、「百万を死地に投じ」死中に活を求める限界状況である。それだけに、かかる場にのぞむ決断には、「我れ、絶対の真理とともにあり」という不動の信念が要求せられ、そこに革命のイデオロギーが必然的に絶対化せられる所以がある。そこでは、我は絶対に正しく、唯我独尊の主であり、敵は絶対に不正であり、不倶戴天の敵である。そこから、平然として「人を殺してどうして悪いのか」とうそぶかれ、「一人一殺」の標語がかかげられ、ついには“人を殺す”というかわりに“人を消す”とまでいわれ、本来かけがえなき一人一人の人間も、火や楽書くらいの扱いをうけるわけである。「君は人間を愛していない、原則しか愛さない」（エドレール）といわれる所以である。まさに「高き固き狭き心」の極致である。かかるイデオロギーの絶対化が、宗教戦争、フランス革命、ナチスの強制収容所の暴逆、スターリン

の暴政、ことに近くは思想と学問の自由を死守する反体制的良心分子に対する精神錯乱的薬物注射というごとき非人道の極の暴挙、その他において、如何なる人間虐殺の修羅場がくりひろげられたかに思いをいたすとき、人は現在におけるイデオロギーの絶対化がついには核戦争による人類絶滅の破局に対する導火線となる脅威に思い至らずにはいられないであろう。しかも唯一のイデオロギー・価値・対象・可能性を無上絶対のものとして熱狂的に信奉し偶像化するとき、一たびそれが崩壊したときには、それを絶対化して有頂天であったその当人は無残この上もない絶望のどん底に沈み、幻滅感・倦怠感・虚脱感・無関心の余り、元の木阿弥の虚無主義者となるのである。零点の虚無主義がイデオロギーの絶対化によって満点をつけられたその蜃気楼が消え去ると、再び零点の虚無主義の亡霊が荒廃した心に襲いかかり、底知れぬ絶望の淵に引きずり込むのである。唯一無上絶対の価値・対象・可能性として絶対化し、こよなく崇敬し傾倒し、惑溺し熱狂した魂が、その絶対化した偶像が無残にも崩れ去り槿花一朝の夢と化し去るとき、如何に深い虚無の幻滅的絶望におちこむかは、転向した革命家、失恋した男女、エリート・コースの挫折者等々のケースのごとく、枚挙に暇なきところである。

以上、われわれは、枠組主義・恰好主義・脱出主義・逃避主義・快楽主義・暴力主義・狂信主義等々と、虚無主義の生態の系列をたどって来たのであるが、その底を貫いて潜んでいるものは、しょせん自己中心の「高き固き狭き心」としての利己的本能にほかならない。そこでは、現実の「苦しさと空しさの二重奏」の重圧からその場のがれ的にその現在の瞬間毎に逃避するために、逃げの手をうつに急であるが、如何に瞬間的陶酔によってシビレていても、それから醒めたときの、二日酔からさめた時にも似た空しいわびしさは如何ともしがたいのである。「苦しさと空しさの二重奏」をまともに受けとめず、一時的に逃避し陶酔しても、その麻酔がとけるとき、またしても虚無の深淵から「苦しさと空しさの二重奏」という不死身の亡霊がまた人々を脅かすのである。すなわち虚無の亡霊は、生殺しの蛇として、またしても頭をもたげてくるのである。そうなると、またしても現実逃避的陶酔行動に走

り、悪循環尽くるところを知らず、人間はいよいよその瞬間の快楽を貪りやまぬ利己的本能そのものの傀儡(かいらい)として狂いたち、ついには反社会的な犯罪行動にも突っ走るのである。しかしそうした最後の狂奔的なもがきも、強弩(きょうど)の末、力つきて何もかも空しくナンセンスということになると、絶望のあまり、虚脱状態におちこみ、精神的に破産して、精神病・自殺の深淵に呑みこまれるのである。ことに現代の高度工業化社会におけるおびただしい潜在的顕在的精神病者・犯罪者・自殺者の輩出は、現代が「不安の時代」であり「絶望の時代」であることを端的に物語っている。テクノロジー発達の極は、自然の破壊と人間の荒廃である。空には、スモッグ、地上には複合汚染、海にはヘドロ、人間は虚無の深淵に漂い亡霊化し、子供まで怪獣を弄び、老若あげて「本心正体は一人もなし」(安藤昌益)という人間破産的修羅場がテクノロジー発達による「工業化」の極にいたるところくりひろげられている。

5. 現代の「世界史的人類的課題」——「脱工業化」

以上のべてきたように、今日までの近代的文明を決定的に規定して来た科学技術(テクノロジー)の驚異的進歩は、物の面において、地上征服・宇宙探険を実現し、文明の限りなき栄光と便益をもたらすとともに、自然破壊・公害・交通地獄・複合汚染・核戦争の脅威など致命的な暗黒面をその鬼子として生み出したのであるが、また心の面においても、テクノロジー文明に伴う「苦しさと空しさの二重奏」にもとずく虚無主義によって、人間疎外・人間喪失という底知れぬ暗黒の深淵に人間を引きずりこみつつあるのである。実に機械文明上昇の極は、人間疎外のどん底と明暗表裏している。技術文明の展開と人間の条件を究明しつづけて来たマムフォードが「機械の上昇と人間の没落とは、同じ過程の両面である。すなわち、今日ほど機械が完璧になった時代はないが、同時に今日ほど人間が奈落に落ちた時代はない」(Mumford, L., The Condition of Man. 1944. p.391) と端的に語る所以である。とくにテクノロジー中心の機械文明の発達による工業化の極に、人類掃滅の核戦争の脅威が現実化するとともに、人間は殺人兵器を使用するほどに虚無主義的な人心

荒廃の暗黒に閉ざされたのである。まさに「亢竜悔いあり」の二十世紀版である。この点で、科学技術の極致と人心荒廃の極致との野合による残虐的殺人集団として、ナチスが想起せられることは、マムフォードの説くがごとくであるが、ヒットラーの強制収容所の非人道的暴戻と前後して、マムフォードの母国の大統領トルーマンは米国の最後の責任者として一体何をしたのであるか。1945年8月5日から同6日の午前8時13分という人類の運命的瞬間にいたるまで、広島市の上空はたえず軍用機が一機づつ"偵察飛行"を装うて通過しつづけ、8時13分には警戒警報も発令されぬままであった。その以前には、「同じ疎開するならば、花の都の広島へ！」という宣伝ビラが投下されるなど、迎撃完封戦術は緻密を極め、自国軍人一人の生命もこよなく尊重されているのに対し、有色人種日本人の非戦闘員に対して一片の警告もなきままに、人類史上最初の原子爆弾が投下され、二十数万の日本人の生命は一瞬にして殺戮され尽されたのであった。周密この上もなき利己心より発する有史以来最初の有色非戦闘員無警告原爆投下こそは、ナチスの強制収容所における虐殺と並んで、人類史上最大最悪の暴虐そのものであると、世界の良識から批判せられているのも、当然である。当時日本の降伏は時間の問題であった。日本は各方面から降伏の案を提示していたのに、それを無視し、"戦争を早く終結させるために！"という一片の名目のもとに、米国大統領トルーマンは原爆投下の最後の責任者として致命的な決断をしたのである。人類史上、彼がヒットラーと肩を並べる最大の戦争犯罪者として永遠に人類の歴史にその名をとどめる所以である。個人としては善良な人物であっても、「高き固き狭き心」の持主は慈悲寛大自己反省に欠け、ついに天人ともに許さざる悪逆暴戻の挙に出たのである。もし将来大量のプルトニウムが彼以上の「高き固き狭き心」の持主やヒットラー流の野心に燃える政治家やイデオロギーの絶対化に突っぱしる革命家の手に入れば、人類掃滅的核戦争にあらざれば、国際的規模の強制収容所入りの運命は免れないであろう。ここに東西相会する「すべてを包擁する原理または統一」（ノースロップ）の場としての「低きやわらかな広き心」の場が人間性の最後の根柢から開かれぬ限り、

人類は終末の日を迎えるのほかはないのである。実にテクノロジー発達による工業化の極、全人類は物心両面にわたり限界状況的な破局に直面している。現代は不安・虚無・絶望の時代である。半世紀前に学祖は「戦争以上に人心の頽敗を招くが故に、将来の世界には大破壊性を有す、ノアの時代かならず来る」（「資料集」②、52頁）と断じられたが、かかる致命的な危機の克服は既述の明治時代の日本国の独立といったような一国の「国家的国民的課題」ではなく、まさに人類全体の「世界的人類的課題」である。前者の解決は、「工業化」に求められたが、後者の解決はまさに「脱工業化」にあるといわねばならない。モラロジーの世界化というとき、われわれは二十世紀後半の人類全体の歴史的課題と取組むことを要求せられる。「世界のモラロジー」は「脱工業化」という「世界的人類的課題」と対決しなくてはならないであろう。

しからば、その「脱工業化」の方向は、一体どこに求められるのであろうか。テクノロジーの驚異的発達による工業化・都市化の極、人々は自然破壊・核武装等によって「自然」nature との「生きた接触」を失い、大地から引きはなされ、水を離れた魚と運命を共にする決定的危機に脅かされるとともに、現代社会の諸性格に伴う「苦しさと空しさの二重奏」よりして、人々は虚無主義的になり、「生活充実の要求」または「意味への意志」を圧殺せられ、「本来の人間性」human nature よりしてその本音を生かす道がとざされ、物心両面にわたって破局に急ぎつつある今日、その原因をなす工業化をこえる道は、いわゆる「自然」にかえる方向にあるのではあるまいか。物心両面にわたる文明病の原因が自然破壊にある以上、脱工業化の方向は自然復帰以外にはないのではないか。二十世紀後半の予言者は、またしても「自然に帰れ！」と説いたルソー（1712—1778）であり、とくにわれわれにとっては「自然真営道」を説いた安藤昌益（1701—？）なのではあるまいか。（この点については、「道徳科学の論文」（(以下「論文」と略す)）1825頁参照）すなわち、現代社会のあらゆる禍因をなす一切の機械文明を廃し、商工業中心の商品・貨幣経済から農業中心の自然経済にかえり、あらゆる意味で原始的

自然に復帰する逆コースこそ、「脱工業化」の方向なのであろうか。

しかしながら、テクノロジー全盛の現代社会から無何有郷的牧歌的自然に逆戻りする逆コースは到底望むべくもない。先ず第一に公害や複合汚染等の禍根を絶つのも、科学技術の研究に俟つのほかはない。その限りでは、今日まで公害等を野放しにして致命的自然破壊をもたらしたテクノロジー発展の軌道は、大きく修正され、根本的に是正されねばならない。ことに核開発にかかわる科学技術については、「人間のために」という本来の精神を忘れ去ったその人類鏖殺(みなごろし)的方向が徹底的に軌道修正せられねばならない。すなわちテクノロジーの抜本的人道化 humanization である。すべての人間を生かす精神すなわち究極的にはモラロジーのいわゆる神の慈悲心の光によって、科学技術が「人間のために」生かされ意味づけられる「心の立て替え」によって、科学技術は人間化せられ、絶頂にあった機械と奈落に落ちこんでいた人間とはその間に正しき平衡をとりかえすに至るのである。かかる人間化の精神からテクノロジーを方向づけ意味づけるためには、われわれは最も深い人間性にかえり、その深い底からわれわれ自身の本音を聞きとらねばならないのである。もともとルソーや昌益が「自然に帰れ！」と説いたとき、そこでは単なる外的自然 nature だけでなく、内的自然として人間の本性 human nature が意味せられていたのであった。まさに人間性の原点にかえり、宇宙的根柢からその「本音」に耳を傾けるところに「自然に帰れ！」という叫びの人間学的な真の意味があるのである。

もとよりかかる人間学的な立場の「心の立て替え」中心主義に対して、暴力革命主義のイデオロギーを絶対化する急進主義がそれこそ前向きの「脱工業化」の唯一の道であると主張し、そこから内乱蜂起の「都市の論理」を説く論者もあるのであるが、高度に工業化が進んだ社会は、その情報網の精密化と近代兵器の進歩により、よしや極度の天変地異の場においてすら、武装蜂起による市街戦の勝利をしかく容易に保証するものではないし、また高度の工業化社会はその「知る権利」「語る自由」を拡大し、各人それぞれの立場より民主主義的自由を行使しつつ、相互に協力して社会共通の問題とくに

「脱工業化」の問題をもいわゆる「社会的知性」によって解決する前向きのコースをとるのが、現代文明国の大勢といわれるであろう。既述のごとく極端な暴力主義こそは、極端な虚無主義そのものなのである。

6. 絶望的限界状況と「意味への意志」

まことに現在の科学技術全盛時代は、自然破壊と人心荒廃という物心両面にわたる絶望的限界状況である。人々は公害や複合汚染によって身体的にむしばまれるとともに、虚無主義によって本心正体を失い、その本音を生かすことなく、瞬間瞬間の陶酔に逃避し、精神的に我を失っている。すべては無意味であり、何もかも白けている絶望的限界状況であるが、ここにまことに注目すべきことは、人間のみがかく無意味な状況を無意味と感知し、その空しさを意識し、それを雲煙過眼視しないで、それに悩み、そこで絶望し、ついには発狂もするのである。すなわち精神的な空虚に平気でいられないで、その空しさにたえられないから、それから逃避し、それをしばし忘れさすものに走り、酒・シンナー・セックス・暴力などに陶酔するのであるが、それから醒めると、また空しさを覚え、また逃避行為に陶酔する悪循環をくりかえすこと、既述のごとくである。そして何もかも苦しくて空しい極に、それにたえかねて、精神病・犯罪・自殺に走るのである。人間のみが自己疎外的になるのである。すなわち人間が何もかも苦しく空しく感じ、一切が無意味であると感じるのは、もともと人間存在そのものが無意味な生活にたえられないで、意味のある充実した生活を求めてやまないからである。そこに人間の本音があるのである。肚の底の本音からして、意味のある充実した生活を求めてやまない心の動きがマムフォードの「生活充実への要求」であり、フランクルの「意味への意志」である。かかる要求なり意志が充されないで何もかも無意味であり虚無で空しいとき、人間は、それにたえられない精神的欲求不満を覚える主体として、実存である。意味ある充実した生活を求めてやまぬ実存的主体として、人間はその本音からの要求・意志が充されぬとき、深い空虚感を覚える。すなわちフランクルのいわゆる「実存的空虚感」

である。その実存的空虚感よりして、絶望のあまり、人間のみが精神病に走り、自殺もするのである。このことを考慮するとき、人間の本音としての「生活充実への要求」または「意味への意志」が人間存在の全人格的統合の中心に生きていることが洞察せられるであろう。ことにこのことを決定的に証示するものは、「苦しさと空しさの二重奏」がその極に達する絶望的限界状況である。

この点ですぐと想起せられるのは、ナチスの強制収容所の酸鼻を極める限界状況である。日々の労働苦役は「苦しさ」の極であり、そのあげく骨と皮になったとき、毒瓦斯による集団虐殺の運命が待ちうけているという「空しさ」の限りである。その故に、この絶望的限界状況において、多くの人が自暴自棄のあまり発狂し自殺したのも、無理からぬことである。しかしながら、フランクルが引いている一入所者の告白に示されているように、こよなく相愛しあっている母子の関係の故に、この人の獄中生活は限りなき苦しさにもかかわらず、それは空しいものでなく、「一つの意味」をもっていたのであった。すなわち、肚の底の本音から相愛し合っている人々にとっては、相手の人は、全宇宙において絶対唯一独自の存在として、代理不可能であり、交換不可能である。その故に、その人にとっては、母は唯一無二の人間であり、またその逆である。ここに、母にとっては、その人が生きていること自体が地上最後の希望であり、そこに彼女の生きる唯一の意味がある以上、その人は、運命が許す限り、如何なる苦しさにも耐えて生きぬかずにはいられぬのである。ここにその人の生きる意味の唯一の根源があるのである。ここに、「一たび生きる意味をつかみとった人は、如何なる苦しさにも耐えて生きぬくことができる」とフランクルが絶望的限界状況における実存哲学的究極真理を語る所以があり、さらにはロダンがその苦しさにたえぬく創作体験よりして「一度秘密を見出した者は、それによってたえず活動することができる」と説く所以であろう。まさに限界状況は人々を絶対的虚無の深淵に引きずりこみ、破滅させもすれば、また人々を究極的意味の根源に目覚めさせ、そこから生きぬく道を開かせもするのである。絶望的限界状況において意味

の究極的根源を自覚し、そこから一切に魂を入れるものをつかみとった点では、学祖はフランクルに四分の一世紀先んずるものがあったのである。

7. 意味賦与圏としての最高道徳的地平——人智と霊智

今やテクノロジー発達の極、虚無の深淵におちこみ、人間疎外的非本来性に悩んでいる人類は、すべての人間的活動に魂を入れる意味の根源の場に帰り、マムフォードのいわゆる「人格全体の要求」the needs of whole personality にこたえ、人間本来の性を回復するために、全人格的態度の根本的転換が必要欠くべからざるものとなるのである。学祖のいわゆる「心の立て替え」である。テクノロジー発展の絶頂において、物心両面から破局に急ぎつつある人類の致命的疾患は、一時的な投薬や局部的手術で治療できるものではない。要求せられるものは、「全生活の方向転換」a reorientation of our whole life であり、「あらゆる人間的努力の究極目標としての人格の立て直し」the re-establishment of the person as the ultimate term of all human effort であり、「方向と態度の根本的転換」a change in direction and attitude であり、「回心—内的なる変化と方向転換」conversion–an inner change and redirection であり「甦生」renewal であると、マムフォードが力説し、次のごとく説く所以である、「端的なる甦生が起り得る唯一の場所は、まさに人格の内部である。実に自我の再形成（心の立て替え）こそは、如何なる社会の隅々また全世界のいたるところで行われねばならない変革のために欠くことのできない第一の条件である。」脱工業化のための物心両面にわたる改革の前提としての「人格の建て直し」「回心」「甦生」が「起り得る唯一の場所は、まさに人格の内部である」というマムフォードの立言は、また一切の認識対象界を意味賦与的総合統一連関として構成する「先験的主観性」を究明したフッセルの先験現象学によって支持せられ、近くは「意味の究極的な貯蔵庫は、独立した自我としての各人の中にある」と説いたジャーシルドの立場（Jersild, A. I., When teachers face themselves. 1955、邦訳186頁）においても、確認せられる。自我は、内なる自己

への関係においてはアイデンティティ identity（自己確認性）、外なる他我への関係においては、エンパシィ empathy（相互共感性）の根源的生産的中心として、あらゆる意味を賦与する代理不可能的人格の生きた核心なのである。その意味賦与的人格の核心が小宇宙的な身体我に発する利己的本能によって左右されるか、それとも大宇宙的な天地の法則にもとずく道徳的本能によって動かされるか、ここに一切の人間活動に意味をあたえ魂をふきこむ最高道徳圏において「心の立て替え」が決定的重大性を有する所以がある。

すべてが虚無の毒気によって生気を失い、何もかも白けて空しい今日、一切の人間活動は魂を失い、マンネリ化している。政治家は「国のために」生きる気概なく、経済人も「社会のために」はたらく精神に欠けるとともに、教育者も「児童・生徒のために」つくす魂を失って、ただ政治的戦術と教育技術の奴隷になっているのである。すなわち、科学技術は高度にすすんですべてが機械化がされても、政治・経済・教育等すべての人間活動に魂をいれる一つのものが欠けているのである。なるほど新幹線もあり、ジェット機もあり、ジャンボ機もあり、コンピューターもあり、電化器具もあり、テクノロジーのおかげで何もかも具わっているが、キリストのいわゆる「なくてはならぬ一つのもの」が欠けているのではないか。ここで、われわれはバルザックの「知られざる傑作」の一節を想起してよいであろう。この作の主人公の老画家は次のごとく大家ポルビュスの作を批評するのである、「まことに君の描いた女は、真に迫っている、女の人がそういう風に頭を少し傾けていることもあるし、まさにそういう着物の着方をしていることもあるし、そういう眼つきをしてうつむいていることもあるし、長い睫毛の影がそういう風に頬の上でふるえていることもある。その限り、まことに真に迫っている。しかし、また同時に、真に迫っていない。それでは、何が欠けているのであるか。何も欠けていない。ただ“何でもないもの”が欠けているのである。しかもその“何でもないもの”が、実はすべてなのである。」Qu'y manque-t-il? Un rien, mais ce rien est tout. 何もかも具わっていても、すべてを統合

して魂をいれる一つのものが欠けていては、万事休するのである。すべての人間活動に魂を入れるものは、一般の人々には「何でもないもの」に見えるが、キリストにとっては、「なくてはならぬ一つのもの」であり、孔子にあっては「一もってこれを貫くもの」である。「九十九知って一つを知らず、しかも残る一つのものが扇の要ということを」といわれる所以である。時間の流れの一こま一こまとして現在の考えや行動が、利己心という「高き固き狭き心」としての利己心から出てくるときは、それは我利我利的言動として自分もひとも我他彼此するうるおいのない貧寒なものとなるが、それに反し、一刻一刻の言動が「永遠の現在」に住する神・仏・天の心としての慈悲心から魂を入れられて「一念一行、仁恕を本とし」「その仁、草木に及ぶ」（「論文」1318）に至れば、八面玲瓏・一視同仁の「低きやわらかな広き心」が「三方よし」のよろこびにみちた豊かな人間性の場を現成するのである。最高道徳的地平のマスター・キイともいう意味をもつ、いわゆる「心の立て替え」なるものは、移ろい行く時間の現在の一こま一こまに執着する利己心という「高き固き狭き心」の次元から、永遠の現在に住する神（仏・天）の慈悲心そのものとしての「低きやわらかな広い心」の次元に人格統合の中心を移し、そこに開ける最高道徳圏よりして、一切の人間活動に意味を賦与し、新生命をふきこむことにほかならない。例えば、最高道徳の原理のうち重大なる意味をもつ義務先行の原理は「あらゆる精神科学の基礎的観念に一つの新生命を賦与するものであります。」（昭和２年推定「モラロジー及びモラル・サイエンスの要点」）とも、「モラロジーにおける最高道徳は、現代における学問・思想・道徳及び信仰につきて、教育的及び宗教的方面における新生命を寄与せむとすることがその目的であるのですから、人心救済に関する如き重大の事件は、最も最高道徳に依らねばならぬのであります。」（「論文」2754—5）とも、「最高道徳は人間社会においてすべての仕事の根本である」（昭和６年１月１日）とも、「モラロジーは万有科学の基礎学である」（昭和12年12月刊行「道徳科学及び最高道徳の実質並びに内容の概略」37）とも、「聖人の教に本づく正しき精神生活の原理たるモラロジー」（昭和11年４月10日）とも、

モラロジーは「人間の精神生活ならびに物質生活に関する精神的基礎学」である（昭和11年4月24日）とも、明確に説かれているところからして、明かに最高道徳的地平は、政治・経済・技術、別して道徳・教育等の人間活動のすべてに意味をあたえ魂をふきこむ意味賦与圏なのである。それは「道徳で一切を綜合秩序づける」「道徳的綜合」（昭和9年4月末）の中心そのものである。ここからして、とくに道徳については、「最高道徳は従来の因襲的道徳の形式を守りつつ、その精神と方法をつねに最高道徳的に使用する云々」（「論文」2072）といわれ、また学祖の最大関心事の一つであった労資問題の解決についても「最高道徳を労資双方の精神に入れて、その各個性を矯正し、以って双方の安心・平和及び幸福実現に努力するのであります」（「論文」1124）といわれるのである。これを要するに、一切の人間活動は最高道徳によって魂を入れられぬ限り、その全きを得ぬのである（昭和7年「人間の真に安心並びに幸福を得る方法」参照）。

かくて一切の人間活動を意味あらしめるように、それに魂を入れる意味賦与圏としてのモラロジーの最高道徳は、その魂を入れる究極の根源をどこに求めるのであろうか。一切の人間活動に魂を入れる最高道徳はその最後の意味の源泉を何処に仰ぐのであろうか。「モラロジーの実質たる最高道徳は聖人正統の法にして、釈迦のいわゆる一乗法にあたり、この世界の無上道なり」（昭和11年7月6日）と端的にいわれている最高道徳智識の最後の光は、何処から発するのであろうか。それは窮極的には「聖人正統の教説」そのものの根源としての神の心そのものから出てくるのである。神は、アリストテレス的に云えば、「動かされずして、動かす」第一動者として、一切を動かし一切に光あらしめる絶対的中心そのものである。ここに神に最後の光を仰ぐモラロジーの智識の独自の性格が出て来る所以がある。

実に最高道徳の智識は単なる智識・人智（いわゆる比量智・分別智）intelligence, scientia をこえて、神の光に発する智慧・霊智・神智（いわゆる直観智・無分別智）wisdom, sapientia なのである。インテリジェンス intelligence は「人間の利己的本能に本づくもの」で、「人智」と訳すべき

もので、「これより派生せるものが異端の智識」であり、ウイズダム wisdom は「神及び聖人の教説に本づく智識」であり、まさに「神智」と訳すべきもので、「これより派生するものが正統の智識であります」といわれるのである（昭和9年8月30日「道徳科学研究所と道徳科学教育」6）。すなわち「人間の智識」に対立して「神の智識」は明確に次元を異にするのである（昭和13年2月5日、「皇室奉仕の事蹟」37、同年3月13日進講案）。「元来、聖人正統の学問であるところのモラロジーの智識 wisdom は、神もしくは聖人の智識 knowledge であるので、人間の利己的本能から出たところの智識 intelligence ではない云々」（同上26）。「人間の智識はその自己保存的本能から出たるものであって、全く利己的なものである」（「論文」3070）のに対して、「最高道徳の智識は神の心より出たる智識であって、利己的智識ではない」（「論文」97）のである。現在の一刻、一刻に執着する利己心から出た人智は、つねに有限であり、部分的であり、対立的であるが、「神の心から出た」「霊智」「全智」wisdom or omniscient wisdom（昭和12年12月31日「道徳科学及び最高道徳の実質並びに内容の概略」37）は、「大宇宙の全法則」を包摂して「永遠の現在」に住する「神の智慧の光」の無限性・全体性を反映して、無限であり、全体的であり、統一的であるとともに、また「神の慈悲の光」を反映して、以下詳しくのべるように、根源的に実践的であり、道徳的である。

8. 一切を包擁する原理

ここに最高道徳的智識の根本的特色があるのである。すなわち、我が身中心の利己心、すなわち「高き固き狭き心」から割り出される小宇宙的人智は、つねに「偏狭なる一部分的な主義とか教理とかいう」性格をもち、いたるところ対立・衝突をひきおこすことを免れないのである（「論文」）序文26・2827・2837・3263等々）。かかる有限にして部分的相対的な「人智」に対して、「霊智」とか「全智」とか呼ばれる最高道徳の大宇宙的智識は、あらゆる対立をこえてすべてを一如に包む全体的絶対的な「低きやわらかな広い

心」の場に住する全円的包括的な智慧である。そこから、人間の利己心から出た「人智」にもとずく忠君愛国主義は、左翼に対立する右翼という一つの翼にすぎない狭い険しい「主義」にすぎないが、最高道徳の「霊智」「全智」から出た忠君愛国はおだやかで、永くつづく旨が次のように説かれている、「最高道徳より出でたる忠君愛国すなわち大義名分の思想は、穏和にして、永続し、真に正しき深き国民教育となる。利己的本能の主義より出でたる忠君愛国は、利己的本能に立脚するところの左翼主義と相対峙するところの主義にして、過激であり、且つ永続せず、故に真に皇室と国民との利益にならず。すなわち右翼と称せられる所以である」(「資料集」⑥、116)。まさに左翼・右翼と相対的に対立するイズム的半円的立場をこえて、その何れも「神の智慧と慈悲の光」のもとに包みとる一円全き立場に成り立つのが、最高道徳の「霊智」であり「全智」である。そこから「モラロジーの大なる理由と緻密なる理由」が次のように説かれる、(1)知徳一体。(2)情理円満。道理に合せぬ情の発露は狂人の態なり。(3)緩急一致。急がば廻れの類、(4)道徳と経済と一致……右のごとくに、モラロジーは従来全く相反せるものとしてあったものが皆一致し、融合することを証明す。故に種々の学問の学理もその天地の法則に合する正しきものは、みな融合して、モラロジーの中に消化す」(「資料集」⑲、78)。実にモラロジーの「霊智」「全智」なるものは、「神の心より出た智識」であり、「大宇宙の全法則」または「天地の法則・公道」の智識にほかならない。まさに二宮尊徳のいわゆる「全円の見」そのものである。それは、まさに宇宙的(コスミック)立場に立ち、全世界的(グローバル)地平を開くものとして、古今一貫、東西一如の全体的真理を示すものにほかならない。かかる全体的真理は、古今の聖人の説くところであり、諸科学が究極的に志向するところである。実にモラロジーは、聖人正統の教説と諸科学の真理とを「天地の公道」「天地自然の法則」において統一するところに、「古今東西一定不変の真理」という進化の極の円現態を体認するのである。「一切の現象は変化すれども、我に人間が天地の公道に従い、最高道徳を実行して、安心・平和及び幸福の生活を営めば、進化するという事実は、古今東西一定不変の真理であるので

す。」(「論文」序文4頁)とも、「聖人の教訓教説及びその実行せられたるところの最高道徳なるものは、まさに天地自然の法則もしくは天地の公道に当るので、人類進化の原動力である」(同上29)ともいわれ、ここに日本の原始的神道、中国の天道(この点については、明治43年1月の「神道の性質」参照)仏教の一乗法、基督やソクラテスの教説の公約数ともいうべき普遍的包括的真理をみとめ、その最高道徳的究極原理としての神の慈悲心について、「釈迦のいわゆる慈悲は、孔子の仁、キリストのアガペーとその原理を同じくしている」(「論文」2122)と結論せられているとともに、また晩年昭和10年4月24日付塾長講話として推定される「教育の根本原理について」のなかに、次のごとく説かれているのである。「いずれにしても、最高道徳と申すのは、天照大神を首(はじ)め奉り、孔子及び釈迦の3つの教がその根本になって居り、これにソクラテスおよびキリストの教を付加したものであります」(「資料集」⑲、123)。まさに最高道徳の究極原理は、「古今東西一定不変の真理」として、ノースロップのいわゆる「一切を包擁する統一または原理」all-embracing unity or principle そのものの先駆的決定的日本版である。明治以前では、二宮尊徳が神儒仏三道の日本的文化綜合を可能にする宇宙的地平をとらえているが、明治以後よく東西両洋にわたる全地球的地平における文化綜合的普遍精神の原理すなわち「一切を包擁する統一」の原理として究明した学祖の業績は、ノースロップ Northrop, F. S. C. の「東西文明の会合」The Meeting of East and West, 1946 に先んずること20年という点で、まことに注目すべき先駆性をもっているといわねばならぬが、ことにテクノロジー発達の極、核兵器の恐るべき開発が諸大国のイデオロギー絶対化に拍車を加えるところ、全人類掃滅的兵器が、政治的イデオロギーを絶対至上とする「高き固き狭き心」によってヒットラー・トルーマンの二の舞を演じる具となるならば、人類は虚無主義の奴隷として狂態に明け暮れする現状をこえて、人類そのものが全滅に帰し去るのほかはないであろう。まさに学祖のいわゆる「ノアの箱舟」時代にさしかかっている現代においては、神の慈悲心にかえり、一視同仁の愛に生きること以外に、人類の明日はないというのが、神意

に同化し、天地の理法に即して生きることを無上命法とするモラロジーの「一切を包擁する原理」なのである。ここにモラロジーの全世界的次元における現代的意義の尤なるものがあるのである。この一点においては、全人類があらゆる人種的偏見・文化的相違、国家的利害、ことにあらゆる政治的イデオロギーの対立を生む「高き固き狭き心」を根本的に立て替え、「一切を包擁する統一」の場を開く最高道徳の「低きやわらかな広い心」に帰入するよりほかはないのであるが、西洋的知性の限界を自覚し、局面の打開を東洋的叡智に求める傾向（カール・ヤスペルス、メダルト・ボス、カール・ユング等々）が強くなった今日、学祖の業績の意義はいよいよ重きを加えたといわれよう。

9. 最高道徳的全智の実践的性格

とはいえ、「一切包摂原理」なるものが、単に思弁的抽象概念、または抽象的普遍にとどまるものであるならば、それは観念的自慰的遊戯にすぎない。また、上述のごとく、モラロジーの智識は、人間の利己心に発する「人智（インテリジェンス）」と次元を異にする「神の智慧の光」による「霊智」「全智」であり、そこから最高道徳は「神的文化」（「論文」1825）であるとまでいわれるのであるが、それは人間の認識能力をこえる神秘的超能力的（オツカルト）なものなのであろうか。この点についての問題二つ、すなわち観念的遊戯性と神秘的惑溺性の問題に対して、決定的に答えるものは、最高道徳の根源的性格が徹頭徹尾独自な意味で実践的道徳的であるということである。先づ第一にモラロジーは神秘的超能力なるもの――たとえば千里眼・透視術・霊交術（テレパシー）・占星術・霊験・霊夢等を徹底的に斥け、迷信を許さぬ科学的批判的見地を採るのである（「論文」553、3256等）。

さらにモラロジーは、観念的自慰的超越性に陶酔するには、余りに人間の利己心のきびしい現実を直視し、そこから自我没却神意同化の「心の立て替え」をたえず敢行する最後の原動力として「神の智慧の光」を仰ぎ、そこに最高道徳の「霊智」「全智」が与えられるとするのである。すなわちいわゆ

る「霊智」「全智」は、先づ「神の智慧の光」をもって自他の心を開発し、さらに「神の慈悲の光」をもって自他の心を救済する智徳一体、情理円満、一切抱擁の無漏智として根源的に実践的道徳的である。すなわち大宇宙的地平に成り立つモラロジーの「霊智」「全智」は、中江藤樹の「大知」（全集第一巻228）と相通ずるものというべく、とくにそれは「神の慈悲の光」のもと、「道徳の実行に最も必要なる原動力たる神（本体）に感激する精神作用」（「論文」1806）において、感応道交神人相会的に神の「真の慈悲と一致する大智識」（同1806）として、徹頭徹尾実践理性的である。「神の智は道徳をふくみ、道徳には智をふくむ」（昭和11年6月）が故に、神意を体得し実践した聖人の「正統の学問と実行」にもとづく最高道徳の智識は、最も根源的な意味で実践的である。「神意を体得せる聖人の智識は、道徳と一体であり、生物として人間の利己的本能から進んだ智識は、道徳とその根底を異にする」（「論文」502）といわれ、「世界諸聖人の智識は、その本質も作用も、みな道徳的である」（同3070）といわれている。この点では、智識成立の根拠を可能にする理性の究極的な本質を実践的道徳的であるとしたカントの実践理性優位の立場を想起せしめるものがあるといわれよう。単なる思弁的観念的神秘的超能力的立場において、神智・霊智・全智などと誇号し神がかり的態度に出るならば、それはカントが痛烈この上もない批判によって完膚なきまでに撃破したスエーデンボルグの神秘説とその運命を共にするのほかはない。この点では、モラロジーの最高道徳圏の神意同化・天人合一的立場がたえざる「自己反省」に裏付けられた「心の立て替え」によって時中的に「聖の時なるもの」として開顕せられることの意味は決定的に重大である。その限り、モラロジーの全智・霊智・神智なるものは、聖人正統の教にもとずき、たえざる自己反省・心使い・心の立て替えによる全人格的実践によって「実践の真」として可能となる大宇宙的智識なのである。かかる実践的行為を抜きにして、“霊智”・“全智”をふりかざし、最高道徳・伝統の虚像を弄び、自己の先入見や利己心を絶対化するとき、そこに生きているものは「高き固き狭き心」というモラロジー自体を内から食い荒らす獅子身中の虫そのもの

である。かかる利己的本能中心の自我を没却し神意に同化する「心の立て替え」を敢行し、たえず自己反省を重ねて天の徳を生かし徳を積む「心使い」に生きぬく「低きやわらかな広い心」の場を開いてくる実践的道徳的大智が、大宇宙的な本来の霊智・全智なのである。かかる大智・霊智・全智は、その「心使い」とその思考作用自体が行為的形成的にその実践内容をそれ自身のうちに有意味的に生産し、その人格存在自体を浄化し、その人格の内容をいわゆる天爵という天の徳をもって充し、いわゆる最高品性を実現せしめる。「東西の思想を総合して見るときは、天爵とはわれわれ人間が神の精神を伝うる聖人の教訓と正統なる学問の根柢を貫く諸原理を体得し、これに随順することによって、はじめて造り出さるる人間の最高品性であって、神の前における最も高貴なる位階であるのです。しかしかくのごとき最高品性を形成し、かつこれを使用するに当っては、もちろん智識を必要とするのであります。しかるに智識は、本来これを所有する個人の先天的素質と経験とに依拠するものでありますが、前者のみに基礎をおくときは、偏狭に堕し、後者のみにとどまるときは、蕪雑なるを免れませぬ。それ故に、最高品性の形成および使用に対して役立つところの智識なるものは、個人の先天的素質と経験とを含むにとどまらず、さらにこれら両者が神の精神を伝うるところの聖人の教訓および純粋正統の学問によって洗練されたものでなければなりませぬ。かく洗練されたる智識は、偏狭もしくは蕪雑の弊を免れ、公平・該博・周到且つ清新なるものとなり得るのであります。かかる智識を有し、自由に活動し得る最高品性すなわち天爵を賦与さるることが一たびできたならば、人爵すなわち名誉・金力・権力もしくは社会の地位のごときものは、自然にその最高品性の所有者に加わり来たるものはいうまでもなく、健康・長寿および子孫の永続のごとき、全く人力をもって自由にすべからざるところの偉大なる幸福さえも、これを享受し得る確実なる基礎が賦与さるるのであります」（「論文」2048―9）。聖人の純粋正統の教を通じて、「神の慈悲の光」「神の智慧の光」を仰ぎ、根本的な「心の立て替え」を行い、たえず入念な「心使い」と徹底的な「自己反省」によって、「一念一行，仁恕を本とし」

個々の行為を「一以って貫く」全人格的統合性によって、日に孜々にして日に新なる実践的創造性に徹するところ、モラロジーの「一切を抱擁する原理」は、抽象的普遍の地平をはるかに越えて、個々の具体的生活に隅なく貫徹する具体的普遍そのものである。この点は、つとに学祖が「聖人とその階級を同一にする」いわゆる「士」の説文解字的淵源よりして解明せられているのである。すなわち、明治39年2月20日の精密な文献学的考察をふまえた講演「支那における立憲政治の根本的思想に就て」において曰く「士の字は十と一とより成っているので、士なるものは、多くのことを知って、しかもこれを一貫して居らねばならぬということであるという古人の説明である。」あらゆる活動を貫くに一つなるをもってし、よくそれに魂を入れるものが、「智徳の全備せるもの」として「聖人とその階級を同一にする」士なのである（「国家学会雑誌」第21巻第2号191―2）。かくて時に刻々の生活相の多を貫くに一をもってする全人格的統合により「心の立て替え」が行われ、日孜々日々新なる実践的創造行為の場において、「一念一行、仁恕を本とする」ところ、まさに「聖の時なる」地平において現成する知行合一的霊智によりて、体験内容は利己心的汚濁より浄められ、刻々、天の徳のエネルギーと一味となり、いわゆる天爵としての徳の系列を永遠の現在に住する万世一系の伝統として現成せしめるとともに、自他ともに天爵に生きる永遠の現在の地平において「聖人正統の教」の言葉によって「偉大なる会話」（ハッチンス）を交わす一視同仁にして四海同胞の霊智的共同体の場を開くのである。

かくして、今・此処の瞬間的生滅的現在という限られた一局面を出でぬ利己的本能に繋縛せられているあらゆる人間活動は、永遠の現在に住する神の慈悲心と智慧の光によって透明にせられ、その多様な断片的内容は一をもって貫かれて有意味的に統合せられて魂をふきこまれるところ、最高道徳的地平が一切の人間活動に生きる意味と生き甲斐をあたえる意味賦与圏として現成するのである。

ここから、「政治及び法律における最高道徳的原理」「軍事上に関する最高道徳的原理」「医術および製薬における最高道徳的原理」「農・工および商

業における最高道徳的原理」「芸術における最高道徳的原理」等々が各々当該分野における人間活動に魂を入れるものとして歴史的に明らかにせられ(「論文」1824以下)、これらの根本原理はあげてそれぞれの分野において万世一系の伝統を現成せしむる「正統」の教であり、「人類の発達および幸福の根本原理」である。かかる「正統」の教また根本原理なるものは、まさしく「永遠の現在」に住し、時と処とによって異るものではなく、万古不易であり、普遍妥当的である。「世界人類の真心且つ永遠の安心・平和及び幸福実現」をはかるモラロジーにおける正統原理は、「永遠の現在」の場において万古不変である。「モラロジーにていわゆる正統は、時代によりて変遷し、もしくは場処によりて変化するものにあらず」と題して、次のごとく説かれている。「宇宙間一切の物質および人事は、みな時代と場処とによりて変質し、もしくは変遷するのであります。しかしながら、人類の発達および幸福に関する根本原理にいたっては、時の古今、地の東西を論ぜず、終始一貫して異なるところがないのであります。」(「論文」2546)。さらに、利己的本能より道徳的本能に進むということが「人類の発達および幸福の根本原理」であると述べ、次のごとく明確に記されている、「かくのごとくにして、人類の発達および幸福の根本原理は、道徳の実行にあることが明らかになったのであります。モラロジーにていわゆる正統は人類の実際生活において神の意志に従い、純道徳的にその精神と行為とを活動せしむることであります。これ実に人類の生存・発達および幸福の根本原理でありますので、その根本原理自体は如何なる時代にも変遷することはなく、且つ如何なる場処もしくは場合にも変化することなき自然の大法則であります。しかしながら、今日吾人の実生活に関する方法のごときは、その時代・場処及び場合によりて、その適用を異にすべきものなるが故に、この根本原理に対しては、枝葉に属するのであります」(「論文」2546—7)。かかる万古不易東西一貫の根本原理を宿しそれによってすべてを基礎付け、一切人間活動に魂を入れる意味賦与圏なるものは、ディルタイのいわゆる「普遍的人間性の根柢」die Grundlage der allgemeinen Menschennatur (Dilthey, W., Gesammelte Schriften

V Bd. S. 329) といわれる地平を想起せしめるものであるが、昭和年代の手記には、明確に「最高道徳と自然法と同一」と記されている(「資料集」⑧、509頁)。さらに昭和9年4月の講演要旨には、「現世にコンバーション(更生)をして、動物から真の人間になり、有為の世界より無為不変の世界に入って、永久の極楽に往生せねばならぬ、最高道徳はこれを教うる方法である。故にこれを無上法または完全智すなわちパーフェクト・ウイズダムという」と記されている。すなわち最高道徳圏は、無上正遍智によって有為転変の世界より無為不変の世界に更生せしめる「永遠の現在」の地平そのものである(「資料集」①、343—4)。まさに「永遠の現在」に住する一つのものよりして、刻々の現在にあらわれる人間活動の多様なるものに意味をあたえ魂をふきこむものが最高道徳圏そのものである。「モラロジーにては、一切人生の基礎は、最高道徳すなわち天地の公道にあるが故に、人間一切の仕事はみな最高道徳の精神にて従事すべきで、隠退とか遁世とかいうことはない」(「資料集」②、41頁) と説かれる所以である。それは断じて現実の実践から浮いた"崇高なる原理"ではないのである。

窮極的には、一切の人間活動を統合し、それに魂をふきこむ根源そのものとしての最高道徳的意味賦与圏は、「聖の時なるもの」としての「永遠の現在」に住する地平であるが、それは神秘的観照的なものでなく、刻々の現在において新しく行われる「自己反省」「心使い」「心の立て替え」によって、行為的生産的に永遠的大宇宙的なものを現在の瞬間において聖なる充実にもたらす場として、根源的に実践的道徳的なのである。ここに神意同化の道を「聖人正統の教」によって開くモラロジーの根本的本質的独自性があるのである。聖人の代表ともいうべき孔子について、あらゆる面から記述せられている「論文」第12章第4節において、「孔子は聖の時なるものなり」という孟子の言葉があげられているが、このことは十分に注目せられねばならない。「聖」とは事として通ぜざるはなきをいい(「書経洪範」)、また事を処してその可にあたりよろしきを得るを「時」という(「楽記」)以上、永遠の場としての「聖」とその刻々の現在の「時」とが時熟して合一し、そのよろしきを

得て、「永遠の現在」の場が行為的実践的に開けるとき、その天人合一神意同化の場が「聖の時なるもの」または「時に中するもの」として現成するのである。孟子が「孔子は時の聖なるものなり」と説けば、中庸が「君子にして時に中す」と説き、また「時の聖なる」孔子の言行録の実践的把握に全人格あげて取組んだ中江藤樹は「論語卿党啓蒙翼伝」において、「卿党全篇、聖の時なるを明かにす、故に首の一節、夫子時中の妙を発して、もって義例となす。(孔子卿党に於いて云々、宗廟朝廷に在りて云々とある)、その於の字、その在の字を玩味し、しかしてもって時中の義を見るべし。けだし中は全体大用の神理なり，時に随って感通して、先天未画の前と合す、これをこれ時中という云々」(全集1,409) と説くのである。まさに「先天未画の前」の「全体大用の神理」という「永遠」の法の場と今・此処の「現在」の場との実践的統一によってよく自我没却神意同化の実践の実があがるとき、「聖の時なるもの」「時に中するもの」が「永遠の現在」において時熟的天人合一的に現成するのである。実に藤樹においても、「時中の理」「時中の妙」「時中の義」さらには「時中の神理」「時中の天理」「時に中する」権の道、「聖賢時中の言行」等々と呼ばれて、その全哲学の核心をなす天人合一、大宇宙即小宇宙の場が、実に「永遠」と「現在」との根源的に実践的な統一の地平なのであるが、その場は、応時接物の間のたえざる「体得」「体察」「体認」という実践によってのみ開かれる無欲無妄温恭自虚の心の場である。すなわちそれは「その心に欲なく、潔静精微の神理明浄にして、その事、時中の天理にかなうを無欲とし無妄とす」(全集3,256) といわれるごとく、まさに自我没却神意同化の場である。もしかかる実践の実なく、「高く固き狭き心」の利己心を没却することなく、小我即大我、小宇宙即大宇宙とするような思い上がりに身を任せるならば、我執の塊としての我はまさしく神がかり的な狂信主義者として、狂態の限りをつくすのである。その心の中核には旧態依然として利己的本能の我執の火を燃やして、神・大宇宙・天・伝統等の聖なるものをふりかざす神がかり的な狂信主義者の「高き固き狭き心」と、たえざる「心使い」によって「心の立て替え」を行う実践によって神の慈悲

心に帰一する自我没却神意同化の実をあげる「低きやわらかな広い心」とは、天地霄壌の差がある。たえず利己心を去り大宇宙の法則につく「心の立て替え」により、自我没却神意同化の実践の実をあげ、無欲無妄慈悲寛大の場にいたりてこそ、「聖の時なるもの」にして「時に中する」永遠の現在の地平が開けるのである。そのためには、学祖が力説してやまぬいわゆる「心使い」「心の立て替え」という全人格的実践による日孜々日々新なる最高道徳的地平が絶えず開顕せられ、天爵の万世一系的伝統が生きて来ねばならない。「聖人正統の教説と実行」にもとづく最高道徳的意味賦与圏は、天と人、神と我、大宇宙と小宇宙、永遠と時間とを全人格的実践によって統一するものとして、徹頭徹尾実践的道徳であって、その統一は神秘的観念的ではないのである。すなわち吉田松陰のいわゆる「実践の真、聖賢伝心の教」であるところに、モラロジーの神智・霊智・全智の窮極の本質と核心がある。

10. モラロジー教育の根本原理

「学を神意において統べ、道を聖人において承ける」(昭和6年9月10日) モラロジーの最高道徳的地平がその実践的道徳的神智性・霊智性によって一切の人間活動を利己心の汚濁より浄化し、それに全き意味において意味をあたえ魂を入れる意味賦与圏であることは、上に明かにしたところであるが、このことは、就中教育に関して決定的である。異端方便の教育法に対し、聖人正統の教育法は、「指導階級者自ら先ず神の智慧の光を体得し、もって人心を開発す」「指導階級者自ら先ず神の慈悲の光を体得し、もって人心を救済す」(昭和11年6月末) といわれているごとく「神の智慧の光」と「神の慈悲の光」とをもって、利己的本能の闇にとざされた人心に光をあたえる開発・救済こそは、学祖の畢生の念願であり、その使命であった。昭和6年初頭に「社会学の結論」として、(1)人間とはその人の心を指す。故に精神に異状あれば、人格も与えず。(2)社会とは人間の心の秩序的集合体なり。故に社会の改良は、人心の開発・救済にあり云々、と説かれている。まさに「世の立て替えの本」は「心の立て替え」そのものにあるのである。かかる「社会学

の結論」からして、「最高道徳における人心の開発と救済」が一切の根本であることが結論せられているのであるが、昭和9年8月末の「道徳科学研究所と道徳科学教育」によれば、開発するとは、「教育(エデュケイション)よりも一層深く人心を智的且つ道徳的にエンライテンすること」を意味し「元来モラロジーにては、このエンライトメント Enlightment すなわち開発をば、エンライヴメント Enlivement すなわち生命を吹き込む（精神的）とかヴァイタライゼイション Vitalization すなわち生気・活力を付与する（肉体的）とかいうことをも含むものとして使用す。いずれにしてもモラロジー教育は従来の一般教育より一層深く人心を神の智慧(ウイズダム)と聖人の実行されたる最高道徳とをもって開発することを目的とするのであります。……一たびモラロジーの教養（啓発・開発）を受けたるものは、如何なる人にても老若男女を論ぜず、真に最高道徳的に生れ変るのであります」（3～4）。いわゆる引き出す教育・模倣・矯正・偏狭丸呑の信仰・哲学的弁論による「部分的」「一時的表面的」「形式的」な「異端方便の教育法」に対して、「聖人正統の教育法」は「神の智慧と慈悲の光をもって」開発救済し、「①全体的に、②永遠に、③魂（根本的）の改造を行う」（「資料集」⑤、293）のである。まさに「神の慈悲の光」と「神の智慧の光」によって、利己心の闇にとざされた人心に光を頒ちあたえ、精神的に「生命(エンライヴ)を吹き込み」肉体的に「生気(ヴァイタライズ)・活力を付与する」最高道徳圏は、人間活動のすべてに魂を入れる意味賦与圏であり、いわゆる一乗法である。すなわち、一切の人間活動に魂を入れるものは、「真に神の心を体得して、慈悲の心をもって人心の開発もしくは救済をしようとする精神」（「論文」2225）に貫かれた最高道徳の根本原理そのものである。最高道徳の根本原理をぬきにした俗流教育学なるものは、画竜点睛を欠く雑学的雑炊にすぎない。昭和8年10月に「エデュケーション（教育），引き出すだけでは、駄目、最高道徳を入れねば、駄目」（「資料集」①、192）とあり、さらに昭和9年8月30日にも、「真の教育はまさに人類進化の法則たる天地の公道に合するところの神の智識(ウイズダム)と神の道徳すなわち最高道徳とに立脚せねばならぬのであります。この神の智識には最高道徳を含み、最高道徳には神の知識を含むが故に、モ

ラロジーの教育を智徳一体の教育と申すのであります。」（「道徳科学研究所と道徳科学教育」）とあり、さらに「論文」も次のように解明している、「人間の精神作用は、単に人間の智識をもって教育するのみにては、足らぬのであります。すなわち人間的智識の開発のみにては、真に人間としての人格を形造らすることはできませぬ。必ずや聖人の教えによりて、神の光明をその精神に与えねばならぬのであります」（2420）。「現代の自然科学によれば、人間と動物とは種類(カインド)の差にあらずして、程度(デグリー)の差なり、聖人の教えはこの動物種たる人間の心に最高道徳を入れて、これを真の人間に生れかわらすものなり」（「資料集」⑨、703）。かかる根拠よりして、次のように、モラロジーの最高道徳的教育の根本原理が明々白々に定義せられるのである。「モラロジー及び最高道徳における教育（Education）は神の智識(ウイズダム)（Wisdom）ウイズダムの事第二版自序文参照と神の慈悲(ベネヴォレンス)（Benevolence）とを人心に扶植して最高の品性(キャラクター)（Character）を造らしめ以て之に相当する所の人格(パーソナリティ)（personality）を完成せしめんとするものである云々」（「論文」2628）。本質的に「神の智慧の光」と「神の慈悲の光」とに最後の根拠をもつモラロジー教育は、また歴史的には神の光を仰ぎ神意をまともに嗣ぐ聖人の正統の学問に直結する教育である。「聖人の教えの原理は、神（天）および神の作用たる天理・天道に基づいている」（「論文」2020）といわれる所以である。「モラロジー教育の本質を約言すれば聖人正統の教たる天地の全法則すなわち人類進化の全法則をもって人間を陶冶せむとする教育であります。すなわち最高道徳をもって先づ人心を開発し、次にこれを救済して更生せしめむとする教育であります。更生とは人間をして至誠且つ慈悲になりてその慈悲心を他人の精神に移植してこれを開発し且つ救済せむとするごとくに生れ更わらしむる事であります。しかして至誠とは人間が利己的本能（selfish instinct）を去る事であり、慈悲とは人間が神意すなわち天地の法則、換言すれば聖人正統の最高道徳に同化して万物を生成し化育する如き精神に為る事をいうのであります。しかしてかくのごとくに人間の精神を最高道徳にて更生せしむる原理、方法及び結果等をモラロジーによりて科学的に説明して新しき最高道徳の人間を造るの

が、モラロジー教育の大綱目であるのです」(昭和12年12月31日)。かくのごときゆるぎなき根拠よりして、神意をまともにつぐ「聖人正統の学問とそれに本づく聖人正統の教育」(「論文」1123) 以外に、モラロジーの教育原理なるものを語る余地はあり得ぬのである。「今後純粋正統の学問を基礎として、家庭もしくは学校において、現代の青年男女を教養することは、きわめて必要のことであります。」(「論文」2595)「大学以下における教育も、一般の社会教育も、国家にて重要なる軍隊教育も、各宗教団体における宗教教育も、みな純粋正統の学問に基づかねばならぬ云々」(同2584) と説かれ、昭和後年にいたりても、次のごとく明確に説かれている。「必ずや天地自然の法則たる因果律の存在を信じ、神の精神に同化して、天命に従って行動することを目的とせる聖人正統の真伝によるモラロジーならびに最高道徳の教育によらねば、人間の精神を根本的に立て直すことはできぬ」(「資料集」⑧、439)といわれるごとく、まさに吉田松陰のいわゆる「聖賢伝心の教」としての「純粋正統の学問」にもとづく最高道徳的根本原理をぬきにした俗流教育学くらい、本来のモラロジー教育学と白雲万里なるものはないのである。

「第二五十鈴河畔の教訓」(昭和8年11月23日)に曰く、「モラロジーを学ぶものは、つねに聖人正統の智徳一体の学問及び教育を志ざし、好んでモラロジーに関する著書と聖人の原典とを読み、その真理実行を心懸(こころが)け、且つ子孫を鞭撻して、自己に倣(なら)わしむべし。異端の学問は害あれど、正統の学問は人間の実生活になくてはならぬものなり。」まさに「以経説経」「述而不作」の古典尊重主義として、「原典本位、他は一言を添削するを得ず」(「資料集」⑧、445) とまでいわれるのである。古典をあくまで教育の中心におく点では、ハッチンスやアードラーやマリタン等の「偉大なる書物による教育法」great book method または「偉大なる会話」great conversation の立場を想起せしめるが、とくにモラロジー教育のいちじるしい特色は、単なる書物学問の次元をこえて、あくまで実践性を高調する点にある。吉田松陰のいわゆる「実践の真」が徹頭徹尾重大視されるのである。昭和12年3月本科修了生に対する訓示には冒頭に「モラロジーの実行を忘るるなかれ、この一つにて他

日の出世・幸福疑いなし」とあり、次に「モラロジーの原典を絶えず読むべし」と示されているのであるが、実に科学としてのモラロジーと最高道徳の実践との関係は、密接不可分の関係である。「モラロジーは一つの科学なれば、智的にその原理を研究し且つ理解すれば、その目的は達成さるるとも云えましよう。然るに最高道徳は人間の品性完成の本質的手段として存在するものでありますから、単に理解に止まらず、必ずその実行を必要とするのであります。元来、智識は哲学にせよ、科学にせよ、凡そ如何なるものにせよ、みな人間の経験から起ったものであります。従って実際を離れて科学の存在はなきはずなれど、しかし真理の研究はこれを実際生活と引き離して遂行され得るのであります。それ故、モラロジーのごとき人間の品性完成の科学でも、単に純理上から見れば、やはりこれは研究と理解とのみによって、その目的は或る意味に於て達せらるるものとして差支ありませぬ。しかしながら最高道徳に至っては、これを実行せねば、自己の品性を完成し、幸福を享受し、且つモラロジーの究極の目的を達成することは出来ぬのでありますから、その実行はただに最高道徳の生命であるのみならず、さらに研究と理解とを主とするところのモラロジーの生命であるともいい得るのです。すなわち換言すれば、最高道徳は自然と人間との法則に関する最高智識にして、同時にこれを実行する事を要するものであるのです。しかして世界の聖人及び準聖人はつとにこれを実行せられて居り、且つ浅学菲徳(ウスキトク)なれども、私が20年来古聖人の足跡を踐(フ)み躬親(ミミズカ)ら聊かこれを実行して、もって今日あるを致して居るのであります。それ故に当該モラロジーの最初の著書たる本書に於て説かれてある最高道徳に関する記述は、言々句々みな生命を含蓄して居るのであります。しかして真に生命を有する所の最高道徳の種子はこれを他人の精神へも移植し得る可能性を有して居るのであります。」(「論文」2051—2) さらに次のごとく説かれているのである、「かかる純粋正統の学問によるところの教育をうけたる者は、全く従来の旧教育を受けたる者に比して、卓越せる高き品性と能力とを形成することができるのであります。これ私の20年来親しく経験せるところでありますので、毫も疑問の余地はありませぬ」

(「論文」2587)。カント的にいえば、最高道徳的実践をぬきにした教育学の体系は、空虚なのであり、最高道徳的智識を欠くとき、その教育実践は盲目であるといわれようが、最高道徳と道徳科学を一貫するものは、実践・実行そのものである。「ただ聖人の教訓を記せる書籍、偉人の筆になれる文章、もしくはモラロジーの最初の著書たる本書のごときは、その実行者の生命が一字一句の中に生きて居りますから、万世の後といえども、偉大なる感化力を有して居るのであります」(「論文」2591—2)。昭和5年7月29日には「最高道徳を実行せぬ方々は、御交際する必要がありません」と端的に断言せられている。とくにモラロジー研究所創立50年記念の日を迎えた今日、千鈞の重みをもって迫って来るものは、昭和11年6月24日創立10周年記念式の式辞の一節である。「私の40年来の血と汗との、人心救済に尽せる苦労の結晶がその根本原理をなし、且つ以上の根本原理を成しているのであります。」「神人 God-man と聖人 Sage との正統の教たるモラロジー」とも「聖人正統の学問と実行をその根拠としている」モラロジーともいわれるごとく、モラロジーは根源的に万世一系の精神伝統につながる純粋正統の教であるとともに、学祖の全生涯あげての「苦労の結晶」として、その真理性が学祖の実行体験によりて「実践の真」として自証せられ再確認せられたのである。ここにモラロジーの根本原理が「時の古今、地の東西を論ぜず、終始一貫して謬るところなき」「万古不易のもの」である所以が確言せられるのである。それだけに、「モラロジー教育の第一歩」は、モラロジーの根本原理を把握し、それを被教育者に少しでも理解させることである(「資料集」①、292)。この点は、「論文」にも次のように説かれている、「モラロジー教育の第一歩は、学校教育においても、社会教育においても、先づモラロジーの原理を各人の理性に訴えて、ある程度までその理解を求むることを主とするのであります」(「論文」2587—8)。さらに昭和8年4月28日には、端的に「モラロジーの研究は科学的、実質は最高道徳、普及法は教育による」と示されている。

この点からして教育に魂を入れる最高道徳という実質・根本精神・根本原理をぬきにして、とかく末節枝葉の方法論や些末的技術主義に走る立場に対

しては、次のごとく云われるのである。「いわゆる教育の欠点に対する救治の方法は、学課の増減・修年限の長短、もしくは教授法の改良のごとき、枝葉の方法をもって、その目的を達し得べきものではないのです。まさにすべからくその教育の根本たる人間の精神開発の原理の改造を必要とするのであります。」(「論文」2585—6)すでに引用したごとく、モラロジーにおいては、その時と所によって変らぬ根本原理に対し、その時その所に応じて実生活にそれを適用する方法は「枝葉」にすぎない。末節枝葉の技術論の雑炊的雑学にはしるところに、現代の教育界が画竜点睛を欠く所以がある。ここでも技術が絶頂に昇りつめて精神が奈落に堕した世紀末的現象が見届けられるのである。たえず教育・政治・経済・技術等、あらゆる人間活動の分野に最後の魂を入れる一つのものまたは全体的なものに眼をそそぎ、「人間が世の中に処して真の安心・平和及び幸福の生活を増進し得るところの、全体にわたる根本原理と根本方法とを教うること」をもって「最高道徳における教育の根本原理」とする(昭和11年4月24日講話)学祖にとっては、最高道徳的地平の根本原理をぬきにして、モラロジー教育の方法を語る余地などあり得なかったのである。

しかも最高道徳の諸原理は、上来明らかにせられたごとく、徹底的に実践的道徳的に把握せられたものである。それは抽象的な概念でもなければ、現実から遊離した“崇高な原理”でもないのである。道徳的実践そのものによって把握せられ、徹頭徹尾実践的道徳的性格をもつ最高道徳的原理は、実践によって媒介せられるとともに、実践を媒介する原理として、まさに具体的普遍なのである。それは現実と生きたつながりをもち、現実的実践の本質的根柢をなす原理であるとともに、現実的実践の場の諸問題を解決する動力・方法をも宿すものである。とくに注目すべきことは、学祖がその最高道徳的原理によって労働者と資本家との間のいわゆる労資問題を解決する実践に心血をそそぎ、見るべき成果があげられたということである。そこには、最高道徳の原理そのものが現実ばなれした抽象的な“崇高な原理”ではなく、現実の問題そのものを解決する具体的方法自体をも宿していることが証しされ

ているのである。原理と方法とを分けて考えるならば、それは最高道徳的原理の本質に対する致命的無理解を示すものである。

もともと現実社会の問題は、政治・経済・教育その何れの場においても、きびしい対立をふくんでいる。すなわち、保守と進歩、企業家と労働者、文部省と日教組等々の尖鋭な政治的対立である。教育方法自体の場においても、外からの指導か、それとも内からの成長か（リット），解放か、それとも拘束か（コーン），個人中心か、それとも社会中心か（ナトロプ）等々いたるところいわゆる「教育学的二律背反」という学説的対立があるのであるが、それにもまして教育現場をゆるがす深刻なる対立は、上述の政治的対立である。ついに暴力沙汰に及ぶほどに深刻陰惨なる抗争が行われる教育現実の場においては、しかく簡単に問題を解決する万能薬的方法はないのである。近代的学習論の結論の一つは、学習方法に万能薬はないということであるといわれる所以である（拙著「近代学習原論」参照）。ことに峻烈なるイデオロギー抗争の渦まく教育の現場においては、如何なる方法をもって臨むも、問題を解決する術もなく、ついには勤評問題・教科書検定問題のごとく、最後の結着をつける場は法廷闘争となるのである。その最後の決定を下す裁判官は何によって判決するのであるか。その判決の根拠となるものは、何らかの意味でいわゆる「権利根拠」Rechtsgrund であり、普遍妥当的法則であり、原理である。ディルタイが「教育の権利根拠」について徹底的に追求した所以である。かくて二律背反的さらには政治的な対立をふくむ教育方法をめぐるあらゆる抗争に究極的判定を下すものは、ついに原理以外の何ものでもない。教育の場においては、方法と原理は、木に竹をついだように、外的に寄木細工的に結合されるのでなく、真の具体的方法は原理から出て原理に帰るものとして、両者相互に相依り一円行道をなすのである。ことにモラロジーにおいては、その原理はあげて実践的道徳的に現実の生きた人間生活の現実の媒介によって統合的に把握せられた具体的普遍であるから、現実生活に直面するごとに、最高道徳的原理に基ずいて反省するならば、必ず現実的に如何に問題に対処し、如何に問題を解決し、如何に生き、

如何に進退すべきかという具体的方法が自ずと体得せられ体現せられるのである。そこに、原理と方法との水ももらさぬモラロジーの教が「聖人正統の教説と実行」にもとずく「実践の真、聖賢伝心の教」として時流を抜いて永遠に生きる所以である。

その限り、単なる直訳的外国教育思想をふりかざして時流に乗る当時の線香花火的教育思潮なるものに伍するがごときことは、学祖の思いも及ばぬところであった。この点について、「最高道徳は宗教でないと同時に、偏(かたよ)った教育上の一つの主義の現れでもないのであります」（昭和6年9月15日）と明々白々に語られている。その最高品性の完成をめざすモラロジー教育は、多くの教育思潮の一つとしてのいわゆる全人教育思想などとは次元を異にするものとして、同日に語るべきものではあり得ないのである。それだけに、モラロジーの原典に深く沈潜することなく、主観的な概念や他の学派の範疇をもって独断的解釈に走ったり、モラロジーの根本原理の相互関関的構造を正しく把握しないで、片言隻句をとらえて勇猛果敢な批評をしたり、性急な現代化プランをでっち上げるなど、およそ「純粋正統の学問」としてのモラロジーを冒瀆するも甚しいものというのほかはない。最高道徳的原理をぬきにしてまで急がねばならぬモラロジー教育の問題などあり得る筈がない。結局「聖人の教説と実行を根拠とする」モラロジーの根本精神の実践的体得がアルファでありオメガであるといわねばならない。この点では、次の「論文」の一節は、モラロジーの現代化または刷新・超越に急ぐ論者の頂門の一針として玩味熟読してなお余りありというべきであろう。「ここにまたさらに注意すべき事があります。それは、学問・智識もしくは社会の地位高き人にして、いささか最高道徳に感ずる時には、直ちにその普及のために軽々に種々なる計画を提出するものがあるのです。この場合には、至誠の足らぬ多くの人々は直ちにこれを喜び、伝統の先行者もしくはその子孫をさしおきて、その計画に賛成し且つ狂奔するものが出づるのであります。しかるにこれらは何れもともにその最高道徳による改心(コンヴァーション)の結果でないのですから、かえって後には最高道徳の破壊者として終るに過ぎないのであります。故にかか

る軽挙は深くこれを戒めて、失敗を招かぬようにせねばなりませぬ。すなわち最高道徳とは各個人が各自に聖人の教えに感化されて改心(コンヴァーション)を為し、至誠及び慈悲の精神となり、上に向っては、伝統の恩を報じ、下に向っては、この自己の最高道徳的精神を他人の精神に移植してこれを開発する事であるのです。かの妄りに最高道徳を世に普及せんとして、これに焦慮し、その普及に関する事業を興す事に熱中するごとき幼稚なる物質的な行動は、全然最高道徳にては、排斥するのであります」(「論文」2397—8)。いわゆる現代化または超越の道は、しかく安易に開けるものではないのである。かってヴィンデルバンドがその名著 Präludien 1883 において Kant verstehen, heisst über ihn hinausgehen. と書いたことは、有名であるが、この一文は一般に「カントを理解することは、カントを超越することである」と訳されている。しかし über ihn hinausgehen をしかく簡単に訳することは適当ではないであろう。というのは、この一句は、「彼の中に入りこんで、そこから出て超えて行く」ことを意味しているからである。すなわち、その中にじっくり入りこんで、その本質を内面的に理解し、その真精神を正しく体得した上で、現在の状況に即してそれを現代化するために、そこから出てそれを超えて行く内面的超越でなくては、真の超越ではないのである。まして聖人君子の正統の学としてのモラロジーは、多を貫くに一をもってし、あらゆる人間活動とくにそのうちでも最も重大な位置を占める教育に魂を入れる原理そのものである。かかる根本的原理について、安易に超越を語ることはそれ自体問題である。モラロジーにおいては、最高道徳的原理の徹底的内面的把握をぬきにして、モラロジー教育を語る余地はあり得ないのである。晩年の学則書に敢然として「モラロジー教育は、教育として実に古今東西未曾有の万全無瑕(ムキズ)の性質を有する教育(丸点は学祖自身)であります」(昭和9年8月30日)と書かれた所以である。このことは、儼然たる歴史的事実である。かかる事実を無視して、放恣なる言説・行動に出ることは、最高道徳圏外に出ること以外の何ものでもない。儼然たる歴史的事実を明確に確認した上で、去就を自己の責任において自由に決定してこそ、学問の自由を語り得るのである。こ

とに精神科学の領域においては、歴史的な事実を無視して、主観的にして恣意的な概念操作に終始することをもって、"学問の自由" などと妄想するところには、学問と教育の救うべくもない頽廃があるのみである。かかる態度をもってする限り、伝統の本質など到底把握せられるものではない。以上によって、最高道徳圏が一切の人間活動に魂を入れる意味賦与圏であることを明らかにし、とくに教育に魂を入れる窮極原理はモラロジーにおいては最高道徳的原理以外にあり得ぬことを各方面から明らかにし、その間に、脱工業化・虚無主義の克服・東西精神の会合としての一切抱擁的地平の開顕等の「現代の世界史的人類的課題」にこたえるところに、モラロジーの現代的意義とその使命があることを明らかにしたのであるが、かかる課題にこたえることは、容易ならぬことである。単なる主観主義的誇負や観念的陶酔などに止まるならば、これくらい誤ったものはない。ここで要求せられるものは、あくまで最高道徳的に修練を重ねて使命の道に生きぬく実践一筋の道である。そのためには、いよいよ最高道徳的自覚を深めることが必須欠くべからざるものとなる。そこから、われわれは最高道徳的意味賦与圏の基本構造を徹底的に究明し、とくに最高道徳的諸原理の構造聯関を的確に把握しなくてはならない。これこそモラロジー研究の核心をなす根本問題である。この核心問題の解明こそは、モラロジーの「世界史的人類的課題」を解く鍵をなすものとして、本論をなすものである。かかる本論の展開は、次の機会にゆずり、本稿はその序論という意味をもつものであるが、もともと「モラロジーの現代的意義」という問題は「世界史的人類的課題」にかかわるだけに、現代の世界各国の代表的学者の見解・所説をできるだけ周密に検討するという点では、学祖が自説を展開するにあたり、とくに「論文」においては、極めて多方面的に当時の内外の学者の見解・所説をあげられたことに深く学ぶべきであろうが、今回はその点に関しても、必要と思われる限りの範囲にとどめたことを諒承されたい。

自反的総括。以上の拙稿を草し来って、またしても思い至るのは、自説のみを絶対至上と考える人間の愚かさであり、温恭自虚の「心づかい」を忘れ

去った「高き固き狭き心」の根深さである。慈悲寛大の精神よりして、幾重にも自己反省に徹しぬく「心づかい」のたえざる実践を忘れ去るとき、何人もモラロジーには縁なき衆生に転落することを免れないのである。いずれにせよ、㈠「論文」等の原典との悪戦苦闘を辞せぬねばり強き研究を裏付けるに、㈡「日記」というヒューマン・ドキュメント(人間記録)の心読をもってする。その間に、㈢最高道徳的諸原理をたえざる実践・実行によって確認し検証し体得し体認し、㈣最高道徳的伝統を今・此処においてたえず創造的に維持することによってのみ、「聖人正統の教説と実行」にもとづくモラロジーの根本的把握は可能となるのである。実践・体得・体認をぬきにした概念的雑学とは次元を異にするモラロジー的地平は、入るも出づるも、すべて最高道徳的実践のみである。実践的体認をぬきにして、最高道徳的諸原理の把握はあり得ない。「四十年来の血と汗との、人心救済に尽せる苦労の結晶がその根本原理をなしている」と自ら語られた学祖の根本精神は、また四十年の生涯を一貫して「往くとして、学にあらざるはなし、入るとして、自得せざるなし」という実践哲学のもとに生きぬいた中江藤樹の心学精神などと呼応して、まさしく「聖人正統の学問と実行」という最高道徳的実践の伝統をまともに継承し生かしぬいた原動力そのものにほかならない。窮極的には実践・体察・体認・体得によってのみ自覚せられた最高道徳的諸原理は、また決定的に実践・体察・体認・体得によってのみ把握せられ、再確認せられ、人間の歴史を創って行くのである。